第６８９号　令和６年（2024）11月28日発行

千葉教育

千葉の子どもたちの未来のために

梅

令和６年度
No.６８９

特集　学級経営を考える

◯シリーズ　現代の教育事情

国立大学法人上越教育大学　教授　赤坂　真二
県総合教育センターカリキュラム開発部研究開発班

◯提　言

日本パラリンピック委員会委員長　河合　純一

千葉県総合教育センター

学校自慢

みんなの「いいね！」をみんなのために

東金市立東小学校校長　新田（にった）　篤（あつし）

1　はじめに

表紙の写真は、昨年度本校が行った、創立50周年記念行事での「バルーンリリース」の一場面である。千葉県の東部、東金市に位置する本校は、601名の児童と54名の教職員が「ひとみ輝き　笑顔いっぱいの東っ子　～夢や目標に向かってチャレンジする児童の育成～」の実現を目指す、地域に愛される小学校である。

2　みんなの「いいね！」をみんなのために

本校の職員は、今年度の重点「自己肯定感を高める学びと場の工夫」に努めている。また、子供は「みんなの『いいね！』をみんなのために」を合い言葉に、学校生活を日々楽しんでいる。

この「いいね！」の言葉は、昨年度から広めたものである。子供たちは、互いの「いいね！」を見付けたり、帰りの会等で発表し合ったりして、互いのよさを認め、生かしていこうとしている。

私は、子供と会話する際に「いいね！カード」を渡すことで、コミュニケーションのきっかけとなるように努めている。また、集会や行事の際に、全校で「いいね！」の合い言葉を言うことで、意識付けを図っている。

3　東っ子支援会議

本校には、様々な家庭環境や発達障害等から、学校へのハードルが高かったり、登校しても居心地の悪さを感じていたりする児童が多くいる。そのような子供を、切れ目なく包括的に支援していくために「東っ子支援会議」を創設した。

子供が抱える課題は多様かつ複層的である。したがって、様々な角度からの考察や分析、柔軟な対応や支援が必要である。この会議を充実させることで、従来、生徒指導や教育相談、特別支援教育等で取り上げてきた課題をワンストップで受け止め、より組織的に対応していく。「東っ子支援会議」は全員参加で、低・中・高学年の３部会に分かれて行う。課題を抱える子供を、複数の教職員で支援していくための第一歩である。

4　「三方よし」の学校づくり

地域と共に歩む学校・教職員を目指し、「三方よし」すなわち「子供よし、学校よし、保護者・地域よし」の学校づくりに取り組んでいる。

昨年度、卒業を間近に控えた６年生は、地域への恩返しとして、地域の美化活動に取り組んだ。地域の方々からのお礼の言葉は、子供たちを強く勇気付けた。

また、教職員は、地域行事に自発的に参加している。昨年度は、東金市主催の「ときめけ東金スポーツフェスティバル2023」や地元田間地区主催の「田間物語リレーマラソン」に参加し、チームとして好成績をあげている。子供たちは、自校の先生の活躍を目の当たりにし、憧れや尊敬の気持ちをもつことができた。また、保護者から親しみをもって受け入れられると共に、信頼関係も深めることができた。

「三方よし」の学校づくりは、着実に進んでいる。

目　次

◆学校自慢　みんなの「いいね！」をみんなのために　東金市立東小学校校長　新田　篤
◆提言　パラリンピックを通して考える共生社会　日本パラリンピック委員会委員長　河合　純一…2

シリーズ　現代の教育事情　学級経営を考える

■学級経営のフレームワーク　国立大学法人上越教育大学教授　赤坂　真二…4
■好ましい人間関係を育む学級づくりについて～「学級づくりガイドブック」より～　県総合教育センターカリキュラム開発部研究開発班…8

チーム学校の仲間たち

■学校を創る　「希望の登校　満足の下校」を目指して～子供たちも教職員も幸せに過ごせる学校づくり～　我孫子市立我孫子第三小学校校長　加藤貴久子…12
■学校を支える　「保護者・卒業生・地域に支えられた教育活動について」　県立浦安高等学校教頭　吉田美佳子…14
■学級を創る　「笑顔あふれる学級」を目指して　多古町立久賀小学校教諭　高橋　志穂…16
■学級を創る　本音で語り合える集団づくりの工夫～思考ツールを用いて～　袖ケ浦市立平川中学校教諭　川上加奈子…18
■学級を創る　自己実現ができる学級づくり～個人と集団の成長を往還させる教師の働きかけ～　松戸市立旭町小学校教諭　杉本　一生…20
■学級を創る　“誰一人取り残すことのない学級経営”をするために　柏市立柏中学校教諭　村政　雄輝…22
■学級を創る　すべては子どもたちのために～学級経営を生かした「授業創り」～　山武市立日向小学校教諭　髙梨　晃一…24

長期研修生報告

■令和５年度長期研修生の研究の紹介　令和５年度長期研修生…26

ケーススタディ～Change the world～

■学習者主体の学びを実現するためのICT支援ツール「Ne! クスト」を活用した授業実践　県立特別支援学校流山高等学園教諭　山﨑慶太郎…30

情報アラカルト

■令和６年度研究発表会について　県総合教育センター・県子どもと親のサポートセンター…32
■「全国学力・学習状況調査」結果の活用について　県総合教育センター学力調査部…33
■県文書館企画展「海を渡った房総の人びと」　県文書館…34
■国際パラリンピック委員会公認教材『I'm POSSIBLE（アイムポッシブル）』日本版　日本パラリンピック委員会『I'm POSSIBLE』日本版事務局…35

学校　NOW！

■高校NOW！　【連載・県立高校の今】令和６年度　第４回　【解説と紹介】学科紹介①　学科の種類及び普通科について　県教育庁企画管理部教育政策課高校改革推進室…36
◆発信！特別支援教育　通常の学級における聴覚と視覚支援を用いた自作支援ツールによる行動支援の工夫　習志野市立東習志野小学校教諭　土井　淳…38
◆千葉歴史の散歩道　房総のたからもの－人々を魅了した青銅鏡－　県教育庁教育振興部文化財課指定文化財班文化財主事　渡辺　夏海

道　標

令和３年１月の中央教育審議会答申では、2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿を「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学び」とし、「『協働的な学び』において、同じ空間で時間を共にすることで、お互いの感性や考え方等に触れ刺激し合うことの重要性について改めて認識する必要がある。」としている。また、令和４年12月に改訂した生徒指導提要では「学級・ホームルームは、児童生徒にとって、学習や生活など学校生活の基盤となるものです。児童生徒は、学校生活の多くの時間を学級・ホームルームで過ごすため、自己と学級・ホームルームの他の成員との個々の関係や自己と学級・ホームルーム集団との関係は、学校生活そのものに大きな影響を与えることとなります。教員は、個々の児童生徒が、学級・ホームルーム内でよりよい人間関係を築き、学級・ホームルームの生活に適応し、各教科等の学習や様々な活動の効果を高めることができるように、学級・ホームルーム内での個別指導や集団指導を工夫することが求められます。」と示されている。

本県においても、第３期千葉県教育振興基本計画の施策１及び５の主な取組として「よりよい学習活動を支える学校・学級づくりに向けた取組の充実」を掲げており、千葉県教職員研修体系ではステージⅠ（成長期）の目標に「学級経営等で、可能性や活躍の場を引き出す集団作りをしている。」と示している。

このように、学級経営は協働的な学びやよりよい人間関係の構築など、学校生活の基盤となるものであり、すべての教職員が身に付けるべき力でもある。一方、学級経営の内容は多岐にわたるとともに、学校規模や児童生徒の状況、地域との関係等多種多様であり、学級経営に悩んだり、困難を感じる教員も多いと推察される。

本号では、学級経営について有識者による解説や、当センターの調査研究の概要を紹介する。また、担任として悩みや困難を抱え、それらを克服すべく奮闘している先生方など、様々な視点から「学級経営を考える」について語っていただいた。一人一人の先生方にとって、より良い学級経営の一助になれば幸いである。

提言

パラリンピックを通して考える共生社会

公益財団法人日本パラスポーツ協会常務理事
日本パラリンピック委員会委員長　河合（かわい）　純一（じゅんいち）

東京2020パラリンピックから３年、今夏パリにて世界最高峰、最大の障害のあるアスリートたちの祭典が盛大に開催された。

８月28日から９月８日までの12日間、フランス共和国パリ市を中心とした地域で行われ、世界各国地域から168選手団（難民選手団を含む）4,400名ほどのアスリートが集った。日本代表選手団は海外で開催されたパラリンピックでは最大規模（選手175名、競技パートナー、コーチ・スタッフ等、本部スタッフを含めて合計330名）となり、実施された22競技中21競技に出場し、金14、銀10、銅17、合計41個のメダルを獲得した。この結果は前回大会であった東京2020パラリンピックでの金メダル数13個を超える大活躍となった。

いくつか特出すべき点としては、男子の団体球技としては初となる金メダルをゴールボールが獲得し、男女混合の団体競技である車いすラグビーでも金メダルを獲得することができた。メダルだけではないアスリートたちのストーリーとパフォーマンスは多くの方々の心に深く刻まれたものと確信している。

私はこのパラリンピックに1992年のバルセロナ大会から2012年のロンドン大会まで６大会に視覚障害クラスに水泳競技で出場してきた。金メダル５個を含めた21個のメダルを獲得し、2016年には国際パラリンピック委員会（IPC）のパラリンピック殿堂入りをした。

選手を継続しながら、大学卒業後の1998年から静岡県公立中学校の社会科教師となった。

私は静岡県浜名郡舞阪町（現在は浜松市中央区）に生まれた。強度の弱視であったが、15歳、中学３年時に全盲となった。小学生の頃に担任の先生に憧れ、教師になることを夢見て、中学卒業後には上京し、筑波大学附属盲学校（現在は視覚特別支援学校）高等部に進んだ。

当時は特別支援学校以外での全盲の教師というのはほとんど存在しない時代であった。

私自身は障害のある当事者が教師になってはいけないのかという素朴な疑問を持ちつつ、大学では教員免許を取得し、教員採用試験を受けることとした。大学の点字サークルの支えもあり、本当に集中して採用試験に向けての勉強も行い、合格を勝ち取ることができた。

教員時代はTT（チームティーチング）で社会科の授業や学級経営、部活動の指導等を行った。その他にも道徳主任、社会科主任、生徒会顧問などにも挑戦する機会を得た。教師３年目にはシドニーパラリンピックの出場を果たし、生徒たちからの声援を得て、金メダルを獲得することができた。これらは、拙著「夢追いかけて（ひくまの出版）」等に詳述している。

充実した教師生活の中、直面した課題があった。それは、教育界が恐ろしく障害に対する理解が乏しいという現実だった。前述したように障害のある教師はほとんど存在しておらず、障害のある児童生徒は特別支援学校という考えが固定化していると感じた。そのような状況で私は教壇に立ったのだが、生徒たちの反応はいたって素直なものであった。

障害のある先生、パラリンピックで金メダルを取った先生というよりも、自分たちを理解してくれているのか、自分たちを成長させてくれるのか、そこを見られていると強く感じた。それと同時にもっと教育現場が多様な教師によって、教育活動が営まれていけるとよいと考えるようになった。しかし、急激にそのような環境を整えることも難しい。そこで、私は５年間の教員生活を経て、大学院に進学し、「障害理解教育」について研究した。

2003年当時、学校現場では「総合的な学習の時間」の導入に伴い、福祉教育が入ってきた。福祉教育では以前から、障害疑似体験を用いた授業が、小学校から高校生までの段階ごとに車いす体験やアイマスク体験などが実施されていた。この障害疑似体験には、思わぬ落とし穴がある。それは、車いすやアイマスクの短時間の体験では、障害の不自由さや不便さばかりが際立ち、障害に対するマイナスイメージを醸成する結果となりやすいことだ。共生社会の担い手たる子供たちに伝えたいことは障害とは不自由で不便で大変なことなのだということではないはずである。

その解決策の１つとなりうるのが、「パラリンピック教育」であると考えている。パラリンピック教育については、現行の学習指導要領にはパラリンピックが初めて含まれた。それに伴い、東京2020大会のためと思われていたパラリンピック教育が必要なものとして理解されるようになってきた。とはいえ、教科書などで取り上げられるものもそれほど多くなく、多忙な学校現場で取り上げられる優先順位が高くないという課題がある。

国連が掲げるSDGsは世界一とも思われる認知度を誇っている。その17の目標の内、多くがパラリンピック教育を通じて達成可能と考えられている。IPCは国連と「＃WE THE15」というキャンペーンをスタートさせている。世界中には何らかの不自由さ、不便さを抱えている障害のある人たちが15％おり、その誰一人取り残されない社会を目指すムーブメントである。

何もパラリンピック教育というものはパラリンピックの歴史や実施されている競技種目、あるいはアスリートたちに注目した学びだけを指しているのではない。むしろ、パラリンピックで重視している４つの価値「勇気」「強い意志」「インスピレーション」「公平」を正しく理解していくためのツールといえる。とりわけ、共生社会につながる「公平」については、創意工夫をすれば誰もが同じスタートラインにつくことができると気づかせるものであり、多様な学びのきっかけになるはずだ。

日本パラリンピック委員会は『I'm POSSIBLE（アイムポッシブル）』日本版という教材を開発し、教材を無料で活用いただけるようにしている。

私が考えている共生社会のイメージは「フルーツポンチ」型である。「ミックスジュース」も同じようにフルーツを使い、混ざり合っているものであるが、形状は大きく異なっている。それぞれの個性をすりつぶして混ざり合うのではなく、個を生かし合いながら混ざり合うことが目指すべき姿なのではないだろうか。それであれば、どうすれば、個を生かし合いながら混ざり合うことが可能なのだろうか。それぞれの良さを理解し、安心して自分らしさを表現できる環境を整えていくこと、つまり創意工夫をしていくことなのではないかと考えている。皆さんの学級、学年、学校、地域がそうなっているか、再点検をしつつ、パラスポーツの観戦を通じて、共生社会を実現していくために必要な視点を獲得していただけることを願っている。

学級経営のフレームワーク

国立大学法人上越教育大学教授　赤坂（あかさか）　真二（しんじ）

1　アフター・コロナの学校

ある学校から校内研修のご依頼をいただきました。「先生方は日々がんばっているのですが、各クラスで子供同士のトラブルが多く、教育活動の運営が大変。」とのことでした。授業参観をしてみると賑やかさとあたたかな雰囲気のなかで学習活動が展開されていました。離席をする子も先生に反抗的な子も見当たりませんでした。ただ、夜の会が設定されていましたが、出席予定だった方々の３分の１ほどが急遽キャンセルされました。理由は、保護者対応でした。こちらの学校では、春から断続的に保護者からの様々な訴えがあり、放課後はその対応に慌ただしいとのことでした。

次の週に訪れた学校は、かつては市内でも荒れていたことで知られている学校でした。研修の折に、先生方に「そろそろトラブルが起ってくる頃ですが、保護者対応が必要な事案はありましたか？」とお尋ねしてみると、「色々あるけどねえ」と呟きながらも「未だ０」とのことでした。こちらの学校は、数年前から児童の実態を考え校内研修の中心テーマに学級経営を据えて取り組んで来ました。人事異動などで、校内研修のテーマや焦点が変化していくことは公立学校の宿命とも言えますが、管理職はじめ異動して来られる先生方は、児童の実態をよくわかっていて、その時その時で、算数科、道徳科など授業づくりのテーマは変わりますが、学級経営を基盤にすることだけは変えませんでした。

2020年のコロナの第一波下でも、教育委員会と連絡を取り合い、児童同士の交流はどこまで可能かを検討し、協同学習や話し合い活動、ソーシャルスキルトレーニング（SST）などを実践し、児童同士のつながりを築くことを怠りませんでした。

みなさんの学校は、コロナ禍の前後で子供たちの様子、特につながりの視点で見ると何か変化があったでしょうか。ある小学校の教頭が次のような話をしてくれました。

「オンライン授業が普及したこの３年の間、受験対策ならYouTubeで有名講師がたくさん授業を配信しています。勤務校でもオンライン授業の実施がスムーズに行われたので、学習の遅れはほとんどありません。今でも出席停止の子は自宅で教室の映像を見ています。

しかし、コミュニケーション能力は危機的状況です。子供同士のトラブルの際、『あいつが先に死ねって言ったのに、なぜ自分は言ってはいけないの？』、『言わないままじゃ負けじゃないか』といった発言は当たり前に聞かれます。それはこの学校の文化として『常識的考え』に思えるのです。

学校で荒れる子供に対し、教師は指導します。当然のこととしてそれを保護者に連絡します。親は親で、子供を叱りつけます。教師も親も、子供を怒りで抑えてきました。怒りが不信と更なる怒りをつくり出しています。

不信感でいっぱいの子供たちが防衛のために暴れたり、他者を傷つける言葉を言ったりしま

す。実際に暴力が毎日のように起きています。

校内のあらゆる箇所を施錠しないと子供の命を守れない状態です。安心・安全が守られていないのに、学習指導なんてやっても成果が上がらないのは当然だと思いますが、あろうことか先生方は根本原因が見えていないのです。子供をどうやって抑えるかばかり考えています。教師としての能力がないわけではなく、そういう価値観を教育されていないのです。先生方に悪気はありません。知らないだけなんです。

ただ、小学校でも教科担任制が入ってきている中で、これまでのように『学級経営』という伝え方がいいのか、私もどういった伝え方が職員にはまるのかを考えています。これから、どうなっていくのかなと不安です。」

コロナ禍が明ける年にこの学校に赴任した教頭は、勤務校の現状に愕然としたそうです。コロナ禍の間に、知らず知らずに子供と教師の関係、そして学校と保護者の関係は薄れ、職員室としてのまとまりも弱まってしまったというのです。

みなさんの勤務校はいかがでしょうか。様々な制限はあったでしょうが、子供、保護者、教員の関係性を強(したた)かに紡いできていて、今、問題がないわけではありませんが、大きな問題はそれほど起こっていないという状態か、授業を止めず、教科指導の時数の確保に尽力した一方で、子供、保護者、教員同士の関係性の育成は希薄になっているか。単純には分類できないとは思いますが、コロナ禍の影響はいかがなものでしょうか。

2　学級担任の専門性

子供や保護者の多様性に伴うニーズの複雑化によって、学級担任の仕事はとても難しい仕事になっています。しかし、力量形成の視点で見ると、学級担任を取り巻く諸事情はあまり変化していないように思われます。若い先生方からお話を伺うと次のような声が聞かれます。

「なぜ、うちのクラスばかり問題が起こるのかなあって思います。どうして、○○先生の言うことは聞くのに、私の言うことを聞かないの？担任が、○○先生だったら、きっとこうはならないはずって思う一方で、ああ、きっと私は、ハズレのクラスだったんだって子供たちを責めたくなる時があります。

先輩の先生方は、『学級経営が大事だって』言いますけど、私が日々困っているのは、明日の国語や算数をどうしようかなってことです。大体、学級経営が大事だって言っているのに、『教師は授業で勝負』とか言われます。

そもそも学級経営って何ですか？大学でも勉強したことがありません。」

何人かの若手の先生方の声をまとめて構成していますが、けっこうな割合でこうした声を聞きます。学級経営がよくわからないにもかかわらず、大事だって言われることに戸惑いを覚えるようです。

学級経営に悩んでいるのは若手の先生方だけではありません。私の講座を受講後、ベテランの先生方から以下のような感想をいただきました。「私は今年で教員20年目になります。先生がお話されていたように、年々いわゆる大変なクラスを任されることが多く、しかも『できて当たり前』を求められるような気がしています。」、また、「『管理しやすいクラス＝良いクラス』ではないという言葉がとても心に残りました。規律のあるクラスにしようとついつい厳しく接してしまうことが多かったように思います。また、学級経営の問題を１人でどうにかしようとしたり、荒れて

いる学級を他人事と思うのではなく、お互いにカバーし合えるような教員同士の関係づくりもしていきたいです。」、これらのコメントから、学級経営という営みに対する次のような問題が示唆されます。

年齢を重ねるほどに指導の難しいクラスを任される確率は高まるにもかかわらず、組織体制で授業研究はなされますが、学級経営の研究はほとんどなされず、自助努力に任されます。

学級経営の実力はついていないのに、ハードルは高くなる一方です。学級経営をもともと知らないのに、学級経営を学ぼうにも学ぶ場がそう多くあるわけではありません。我流に我流を重ね、誤った指導法を正しいと信じ間違いを繰り返し、ある時、子供や保護者からダメ出しをされて、周囲に相談をすることもできずに心が折れる、といった状況です。

私には不思議でならないのです。これだけ教員の成り手不足、人材確保の必要性が叫ばれている状況で、なぜ、教員のキャリアを守るための研修をシステム化しないのでしょうか。授業を失敗して休職したり、辞職したりする教員はほとんどいませんが、子供や保護者とうまくいかなくなって、そうした選択をせざるを得なくなる教員は少なくないのです。

校内に複数の機能低下した教室があり、それに疲弊し、いつ休もうかという状態の教員が校内にいるにもかかわらず、ニーズから遠いところばかりの研修を積み重ねている理由がよくわかりません。私もかつて小学校の教師でしたから、授業研究に意味がないと言っているわけでありません。公教育ですから、公の目標に資する必要性は認識しているつもりです。しかし、今や教師を取り巻く状況は変わったのです。そして、学級担任は誰でもできる仕事ではなくなったのです。

学級担任にはとても高度な専門性が求められます。教育愛や熱意、使命感に基づく基本的・人間的資質はじめ、児童・生徒の指導に直接関わる実践的資質といった教師としての基本的な資質・能力が求められます。また、経営にかかる能力も求められます。適切な目標と評価規準を設定し、そこに向かって子供とコミュニケーションをとりながらモチベーションを高め、子供同士を組織し、目標達成を通して、一人一人の成長を引き出す力です。全体指導ができる一方で、特別支援教育に関する専門性、個別の指導計画や教育支援計画の作成・活用能力など、個別指導の能力も欠かせません。

子供だけでなく、保護者、外部機関はもちろんですが、管理職や同僚とつながり、ネットワークを形成し、他者と協力的関係を築く力が求められます。チーム学校の実現には、「良質な組織人」が一定数以上必要となります。また、世の中の変化に応じて求められる力は随時変化します。常に学び続け、自分の専門性を高めるアップデート力はますます大事になってくるでしょう。

最早（もはや）、授業力だけでは対応できないことは明らかです。こうしたことは誰もがわかっているにもかかわらず、それだけの力をつける仕組みが全く追いついていないのではないでしょうか。

3　学級経営の基本型

学級担任に求められる力の中心に学級経営があることは自明のことですが、その肝心な学級経営という営みが、学習指導要領において、説明はなされていても定義がなされておらず、今一つはっきしりないのが学級担任のやりづらさになっています。

学級経営は、それぞれの実践家によって捉

え方が異なり、授業成立のための条件整備だと捉える人もいれば、人格形成の機会であると捉える人もいて、なかなか議論がかみ合わなかったりしています。学級経営は学問として確立しておらず、研究が立ち遅れている領域のひとつです。大学の教員養成でも必修科目として設定されていないため、現職の先生方もよくわからないという方が多いわけです。

こうした状況で白松（2017）の整理は、学級経営を捉えるフレームとしてとても重要な示唆を与えてくれます※1。白松は、これまでの学級経営の議論に、生徒指導の視点を加味して、学級経営を３つの営みとして捉えました。学級経営は３層構造となっていて、基盤となるのは**「必然的領域」**と呼ばれる一人一人の人権を尊重する営みです。どの学級もどの教師であろうとも、ここは保障されるという意味で、必然的領域と呼ばれます。つまり、学級という場所は、子供一人一人の人権が守られ、あたたかみのある場所であることが必須条件です。ここでは学級担任の受容的なかかわりが求められますが、他者を傷つけるような言動には毅然とした姿勢で介入的な指導も必要となります。

その上層に来るのが、**「計画的領域」**と呼ばれる、子供の自律のためにできることを増やすための指導が行われる部分です。学習や学級生活に必要な手順やルールが指導され習慣化が目指されます。主体的・対話的で深い学びの実現を目指すのであれば、話し合いの仕方や、互いのかかわり方などの指導も含まれます。生活歴によって必要なものや身に付けるまでの時間は異なるでしょうが、子供にとっては新しい価値や態度やスキルを学ぶことになります。このときに、教えずして叱るだけの指導は論外として、丁寧なかかわりが求められます。必要な行為の意味を伝え（インストラクション）、まず教師自らやって見せ（モデリング）、そして子供たちに試行錯誤の機会を設け（リハーサル）、その遂行状況を見取って、できているところを伝えたり、どうやったら達成できるかを助言したり（フィードバック）します。計画的領域では、秩序の形成がポイントとなります。

児童生徒が安心して学ぶためには、秩序の中で一貫性がある生活環境が必要です。挨拶指導や姿勢指導や給食指導などすべて大事ですが、今一部現場では、過剰な指導が見られることがあります。その指導は児童生徒の将来に資するものなのでしょうか。教室は安心できる場所であるべきです。指導する内容も大事ですが、同時に何のためにどのように指導するかという検討は常にしていきたいものです。計画的領域の指導がうまく機能していけば、指導内容そのものは減っていくことでしょう。

最後の領域は、**「偶発的領域」**と呼ばれる問題解決や文化創造がなされる部分です。児童生徒の主体性を育てようと思ったらこの領域がとても大事です。ここは学級経営のゴールとも言うべき営みです。子供たちで楽しいことを計画したり、学級をよりよくするために問題解決をしたりしながら、学級に良質な文化を形成するのです。

学級担任がその職責を全うするには、必要な専門性を育てる必要があります。まずはこうした学級経営の基本型を共有し、教師が安心して職務を遂行できるようにすることが、今いる人材を守り、そして、魅力的な学校現場を創っていくことにつながるのではないでしょうか。

※１　白松賢『学級経営の教科書』東洋館出版、2017、pp1－32

好ましい人間関係を育む学級づくりについて ～「学級づくりガイドブック」より～

県総合教育センターカリキュラム開発部研究開発班

1 「学級づくりガイドブック」について

カリキュラム開発部研究開発班では、各教科・学級経営等に関する基礎的・実践的な調査研究や、社会の変化や本県の教育課題に即応した実践的な調査研究を行っている。

【ガイドブック表紙】

調査研究の成果物として「授業づくりガイドブック」や「学級づくりガイドブック」等が県総合教育センターホームページ上にWebアップしている。

【目　次】
Ⅰ　はじめに（学級づくり理論）
Ⅱ　学級づくりの進め方
Ⅲ　学級開き
Ⅳ　教師と児童生徒の信頼関係
Ⅴ　児童生徒同士の人間関係
Ⅵ　主体的に活動できる学級
Ⅶ　同僚・保護者との関係づくり
Ⅷ　資料

【学級づくりガイドブックの目次】

本稿では「学級づくりガイドブック（令和６年３月改訂）」を紹介する。ガイドブックは、先生方の日々の学級づくりに役立つ資料となっているので、是非御活用いただきたい。

2 見直されている「学級づくり」の重要性

見直されている「学級づくりの重要性」

学習や生活の基盤として教師と児童(生徒)との信頼関係及び児童(生徒)相互のよりよい人間関係を育てるため、**日頃から学級(ホームルーム)経営の充実を図ること。**

【小・中】学校学習指導要領（平成29年告示）解説　総則編
高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説　総則編

【各校種の学習指導要領より】

これまで、学習指導要領において学級づくりの重要性について記載があったのは小学校のみであった。現行の学習指導要領から、中学校・高等学校でも学級・ホームルームづくりの重要性について言及された。

このことから「児童生徒の学習や生活における学校や学級の重要性」が改めて捉え直されていることが分かる。

3 学級に求められる「好ましい人間関係」

⑴教師と児童生徒の「信頼」関係

教師と児童生徒の人間関係づくりのキーワードは「信頼」である。

教師と児童生徒との人間関係は学級内の人間関係の基盤となる。教師は児童生徒の思いに気付き、それを認め、受容する過程を通して、少しずつ信頼関係が築かれていく。

その積み重ねの上に、学級全体に「信頼」をベースとした人間関係づくりが進んでいくのである。

⑵児童生徒同士の「認め合う」関係

児童生徒同士の人間関係づくりのキーワードは「認め合い」である。

児童生徒にとって、日々の生活で関心が高いのは児童生徒同士の人間関係であろう。教師は日々の指導を通して、児童生徒同士が互いの思いに気付き、それを理解し、受け入れようとする「認め合い」ができるようにすることが求められる。

その積み重ねの上に、児童生徒同士が互いの思いや良さ・違い等をありのまま認め合えるような、「認め合い」をベースとした人間関係づくりが進んでいくのである。

4　好ましい人間関係を育む学級づくりのために

教師と児童生徒・児童生徒同士の人間関係づくりのための考え方や手立て等について、学級づくりガイドブック（令和６年３月改訂）を基に紹介する。

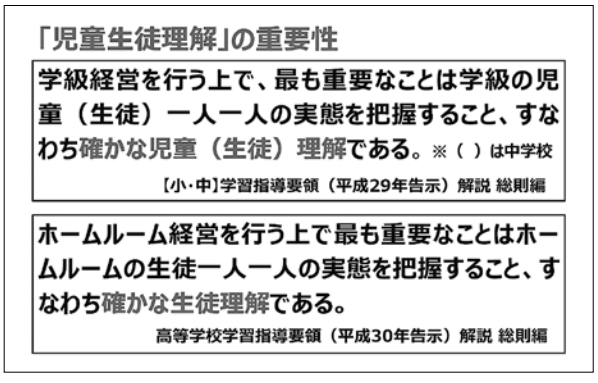
⑴教師と児童生徒の人間関係づくり

①教師としてのふるまい

【「学級づくりガイドブック」より】

児童生徒に身に付けてほしいふるまいや行動は、まず教師自身が率先してやって見せ、良い手本となることが求められる。良い手本を示し続けることで、少しずつ信頼関係が築かれ、児童生徒との人間関係がより良いものになることが期待される。

②児童生徒理解



【カリキュラム開発部研究開発班実施研修資料より】

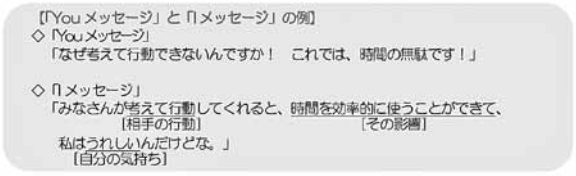
信頼関係の第一歩は相手のことを理解することである。そのためには、日頃の人間的な触れ合いに基づくきめ細かい観察や、児童生徒への共感的理解が求められる。

③自己開示

自己開示とは自分を知ってもらうことである。その中には自分の弱い部分も含まれるので、信頼できる相手でないと打ち明けられない傾向がある。相手からすると「信頼してくれているから、話をしてくれた」と感じるため、自己開示された相手は自分も自己開示しやすくなり、人間関係が深まることが期待できる。

④「Ｉメッセージ」

学校生活において認めたり励ましたりする際の伝え方に「Ｉメッセージ」がある。



【「学級づくりガイドブック」より】

「Ｉメッセージ」は、「私（Ｉ）」を主語にして「相手の行動」「その影響」「自分の気持ち」で構成されている話し方である。「私」を主語にしているため、相手に配慮しながら、自分の主張を伝えることができる。そのため、相手にとっても受け入れやすく信頼関係が成立しやすいといわれている。

⑤「コーチング」

「コーチング」とは、目標実現・問題解決のために、自発性を促し、行動を引き出すコミュニケーションである。一方、「ティーチング」とは主に答えを与えるものであるため、その答え以上のものが生まれないことが懸念される。

コーチングは児童生徒の可能性を信じて、自分で自分の中から答えを引き出すことができるようにサポートする。その結果、自分ができそうな方法を、自分で考えるようになる。それがうまくいったときには、「自分もやればできる」という自己効力感をもつことが期待できる。

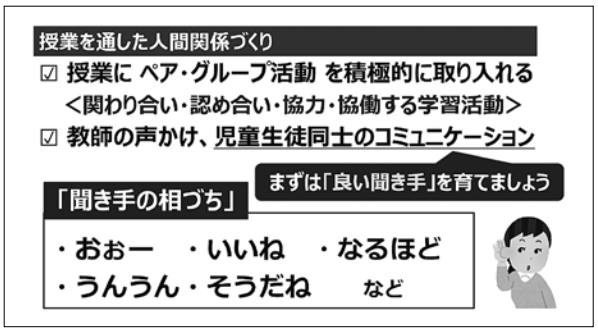
⑵児童生徒同士の人間関係づくり

①学級の状況を把握する

児童生徒同士の人間関係を育むために、その学級集団の状況を理解することが必要

である。児童生徒の関係性は日によって変わる。「年度初めは仲が良かったから、今もきっと仲が良いだろう」と単純に捉えるのではなく、休み時間や登下校、授業の中でどのようなつながりをもっているか、常に現状を捉え直すことが大切である。

②「授業」を大切に



【カリキュラム開発部研究開発班実施研修資料より】

児童生徒同士の人間関係を育むために、年間1000時間程行われる授業の時間を欠かすことはできないだろう。

授業の中で、児童生徒同士が、安心して自己表現できる雰囲気づくりが大切である。そのために、ペアやグループでの話し合い活動は良い機会である。その際に、まずは良い聞き手を育てることから始めるとよい。良い聞き手が育つことが、安心して考えや思いを話すことの第一歩となる。その時に、誰もが話しやすい雰囲気づくりのために「聞き手の相づち」等と称して話し合い活動の中で活用するようにしている学級もある。掲示したり、日々活用したりして、習慣のようになるとよいだろう。

③「行事」は絶好のチャンス

行事は、児童生徒一人一人を育て、人間関係を育む絶好のチャンスである。

一つの目標や目的に向かってみんなで協力をしたり、時には葛藤したりする体験は、自分の意見を主張するばかりではなく、相手を尊重したり、折り合いをつけたりすることを通して、人間関係を築く力を育む。

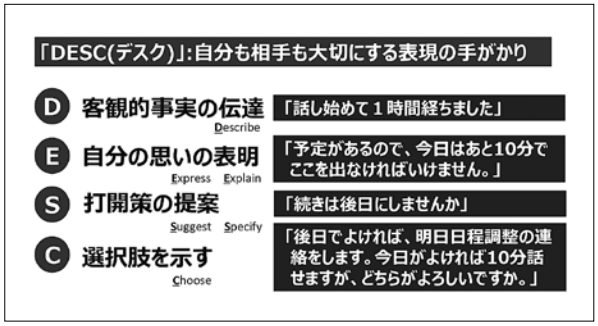
【「学級づくりガイドブック」より】

その際、教師は一つ一つの行事を通して児童生徒に身に付けさせたい資質・能力を明確にし、児童生徒が主体的に取り組めるよう支援することが必要である。

④「アサーション」

「アサーション」とは「自他尊重の自己表現」という意味である。このことにより自分の意見や気持ちをきちんと「伝える」と同時に、相手の話も十分「聴く」ことにつながるため、互いを尊重する人間関係を育むために有効である。

自分のことを伝えると同時に、相手のことも聴く「アサーション」を身に付けられるようにするためには丁寧な指導が必要だが、指導の手がかりとして「デスク」という考え方がある。興味のある方は、参考文献を参照いただきたい。



【カリキュラム開発部研究開発班実施研修資料より】

⑤自発的、自治的な活動の経験

自発的、自治的な活動とは、児童生徒が自ら課題を見出し、その解決方法や実施について合意形成を図り、互いに協力しながら目的を達成していくものである。

年度始めから取り組むことは難しいだろうが、「学校が楽しくなる朝の会・帰りの会」「係活動を『会社活動』にする」等、様々な先行実践がある。総合的な学習の時間（探究の時間）や特別活動、行事等を活用し、教科等横断的に取り組むことでより効果的な活動になるだろう。

自発的、自治的な活動では、ペアや班、全体での話合いを通して合意形成を図ることが求められる。実践の過程において児童生徒の意見や考え、活動を尊重していくことはもちろんだが、教師がしっかりと関わり、適切に支援をしていく必要がある。

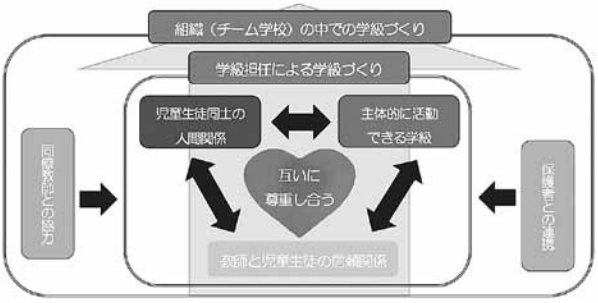
【「学級づくりガイドブック」より】

5　おわりに

児童生徒の多様化に伴い、好ましい人間関係を育む学級づくりを進めることは容易ではないものになるだろう。

おわりにあたり、下記のことを伝えたい。

⑴学級づくりは学校ぐるみで！

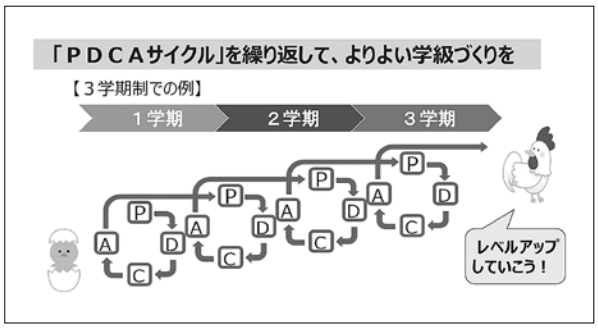


【「学級づくりガイドブック」より】

「学級担任による学級づくり」だが、「組織（チーム学校）の中での学級づくり」という認識も忘れてはいけない。学校の仕事で大切なことは、組織として対応することである。学級づくりには悩みを伴うことが多いが、それを一人で抱え込まず、管理職への報告や同僚教師の協力、保護者との連携等を通して、より良い学級づくりができるようになることを忘れないようにしたい。

⑵「PDCAサイクル」を繰り返して、より良い学級づくりを

学級に、好ましい人間関係づくりが進んでいるかを振り返るために、定期的にPDCAサイクルを回すことができるとよい。そうすることで、現状を見つめ直したり、これまでの取組を見直したりすることができる。そして、これまでの取組を見直すことが、より良い学級づくりが進むよう意識することにつながっていく。



【カリキュラム開発部研究開発班実施研修資料より】

⑶スモールステップで粘り強く支援しよう

学級づくりは、長い道のりを一歩ずつ歩んでいくようなものである。そのため、焦らずに粘り強く、常にこれでいいのかを振り返りながら好ましい人間関係を育む学級づくりに取り組んでいただきたい。児童生徒にとって達成しやすい、身近な目標をスモールステップで与えながら、ゴールを目指していくとよい。その目標が達成できたら、新たな目標を与えそれに向かって活動する、という繰り返しでゴールに近づくようにしていくとよいだろう。

⑷ガイドブックを御覧ください！

「学級づくりガイドブック」を、今後の好ましい人間関係を育む学級づくりにお役立ていただければ幸いである。

ガイドブックアクセス用二次元コード→

【参考文献】

- 「学級づくりガイドブック（令和６年３月改訂）」千葉県総合教育センター　2024
- 「三訂版　アサーション・トレーニング ―さわやかな〈自己表現〉のために」（金子書房）平木典子　2021

学校を創る

「希望の登校　満足の下校」を目指して ～子供たちも教職員も幸せに過ごせる学校づくり～

我孫子市立我孫子第三小学校校長　加藤（かとう）　貴久子（きくこ）

1　はじめに

学校は、学級担任や授業など個々の教職員に任されている部分が多い組織であり、教職員一人一人の指導力の向上が不可欠の組織でもある。

一方で、多様化する教育課題を乗り越えていくためには、教職員一人一人のより高い指導力と対応力を磨くとともに、学校全体で組織的に課題に取り組むことが求められる。

本校の学校教育目標「自ら学び　支え合いたくましく生きる子の育成」の具現化のために校長として私が大切にしていることは、教職員が主体的に学校運営に参画し、各々がもつ力を発揮することである。そのために、心がけていることは、子供たちも教職員もウェルビーイングを高め、幸せに過ごせる学校づくりである。

2　学校の「人財」＝教職員の育成

急激な社会の変化に対応し、今日求められている資質・能力を育成するために、我々は日々全力で取り組んでいる。社会がいかに変化しようとも、社会の変化にしなやかに対応しながら、教育をつかさどることのできる人材の育成は校長の責務であると考える。

⑴誰もが安心できる学級経営の充実

本校は、通常の学級が21学級、特別支援学級が８学級の合計29学級で全校児童は709名の規模の学校である。配慮が必要であったり、困難さを抱えたりしている児童は、通常の学級においても一定数存在している。また、５年経験以下の教員数は、30％弱である。そのような状況のなか、学校生活の基盤となる学級が居心地のよい場所となるようにしていくことは、本校の課題の一つである。

学級経営が、主体的・対話的で深い学びの実現や子供たちの非認知能力の向上に重要であり、子供たちの成長に必要な学び合うための環境を保障することにつながると考え、教職員に次の４点について学校経営の重点として繰り返し伝えている。

①子供たちの安全・安心な学校生活の保障
②心理的安全性の保障された学級経営の充実
③発達支持的な生徒指導
④授業力向上

心と体の健康や学校安全等を重要視した教育課程を編成し、安全・安心な学校づくりに取り組むことを４月最初の職員会議で示し、全教職員で共通理解を図った。子供たちが安心して学校生活が送れるようにするためには、心理的安全性を保障していくことがとても大切であり、そのために具体的に何をしなければならないのかを丁寧に議論した。また、発達支持的な生徒指導についても、改訂された生徒指導提要の考え方をもとに、折に触れ教職員の理解を促している。

⑵学び続ける教職員集団を目指して

本校では、校内研究とは別に、教職員の課題意識に応じて自律的な研修を組織的・計画的に実施している。学校を、教室を、安全・安心な場所にすることで「希望の登校　満足

の下校」を実現するために、これまで行ってきたボトムアップ型の教職員研修について、その一部を紹介する。

○新年度準備研修、教師力向上研修

「学級づくり」、「家庭連携」、「個人面談」、「楽しい学校生活を送るためのアンケート活用」

○組織的対応研修

「学校問題対応」、「いじめ防止」

○フレッシュ研修

学級づくり研修

年度初めの始業式前に、ミドルリーダーが講師となり、全教職員で学級経営についての研修を行った。学級担任の約25％が今年度、本校に異動してきた職員という現状からも、学級づくりについての準備は必要不可欠なものである。チーム三小の一員として全教職員が士気を高め、スタートを切るのにふさわしい充実した研修となった。

⑶校内巡回と教職員へのフィードバック

私は校長として、授業を巡回し、日々の授業観察を通して日頃から情報収集を欠かさないように努めている。そして、教員や学級、児童の様子や課題を把握し、これをフィードバックすることで、個々の教員への適切な支援を行っている。学級の質を高めれば学校力も自然と高まると信じ、これからも子供一人一人が生き生きと安心して生活できる温かい学級経営をすべての教員が行うことができるよう、きめ細かな指導や助言を続けていく。

また、教頭、主幹教諭や教務主任、養護教諭、事務職員（校務会のメンバー）は日々教職員から相談や報告を受けている。そのことについて、校長と情報を共有することによりチーム学校として組織的に対応できるようコミュニケーションを図っている。

3　みんなの居心地を大切にするために人権感覚を育む

毎日の学級経営に欠かせない教師の職能の一つに「人権感覚」が挙げられる。子供たちの人権感覚を磨き、その輪を学級全体、学校全体に広げていく。そのために、先ずは教職員同士の会話量を保障することに注力した。会話がなければ人間関係は構築されない。職員会議や校内研修を対話型のものとし、更にインフォーマルなコミュニケーションを増やすことが必要であり、おしゃべりと笑顔のあふれる職員室を目指している。また、全校朝会や始業式・終業式では、子供たちに向けて、自他のよさを認め合い共感的理解を育むことの大切さを校長講話として伝えている。

4　おわりに

学校は、教職員にとって働きやすく、達成感や明日への活力を見いだせる場所であってほしい。そして、子供たちにとって「希望の登校　満足の下校」の場所であってほしいと願う。日々の課題は山積しているが、「教職員を育て、学校運営を円滑にし、子供たちも教職員も幸せに過ごせる環境を整える」という校長の役割をこれからも全力で果たしていきたい。

学校を支える

「保護者・卒業生・地域に支えられた教育活動について」

県立浦安高等学校教頭　吉田（よしだ）　美佳子（みかこ）

1　はじめに

本校は、千葉県の海面埋め立て事業により誕生した「海楽」という土地に、当時「浦安町」の誘致活動により昭和48年４月に開校し、52年目を迎える学校である。「海楽」という地名は、戦前に遠浅の砂浜を利用した「海楽園」と呼ばれる潮干狩りの行楽地があったことに由来している。本校は、平成16年度から10年間自己啓発指導重点校の指定、平成27年度から学校運営協議会を設置等の歴史がある。その中から、学校を支えてくださった保護者・卒業生・地域の方の取組を紹介する。

2　コミュニティ・スクール

本校は、平成27年度県の指定を受け学校運営協議会が始まり、10年目を迎える。委員は自治会から２名、学識経験者、市役所（卒業生）、地域企業、キャリア教育に関するNPO法人、同窓会会長、PTA会長、中学校校長、本校校長の計10名で、年間３回協議会を開催する。５月の協議会では、校長の経営方針に関し多くの質問や意見が出され、学習活動、キャリア教育、地域の高齢化について協議がなされた。生徒の昨年度の成果を今年度に活かすためにどういう活動が必要かという視点で意見が出され、協議会に参加した本校職員の分掌主任、学年主任も「育てたい生徒像」を改めて確認することができ、今年度の活動方針の参考となった。

５月の学校運営協議会の様子

3　同窓会の活動

毎年６月の第一木曜日に総会が開催される。その一週間前に役員会が開催され総会の議事案を作成する。役員は第３期生から第15期生の７名で構成され、創立50周年記念事業の祝賀会は同窓会の運営で行われた。同窓会からは学校援助費として県大会出場激励金、卒業証書ホルダー代を支援していただいている。

4　PTAの活動

通常の役員会、理事会、総会等の開催はもちろんのこと、その他に全国高等学校PTA連合会大会、関東地区高等学校PTA連合会大会、県定期総会、県研究集会、地区研究集会は、会長、副会長を中心にすべて参加している。

広報・研修委員会では、年２回の広報誌発行、研修の立案、実施を執り行っている。今年は雨天ではあったが、豊洲へのバス研修を行うことができた。

また、年３回学期末に参加者を募って、挨拶運動と美化活動を実施している。

７月の登校指導、この後美化活動も実施

今年の大きな目標は、コロナ禍で実施できずにいた文化祭での食品販売の復活であった。コロナ禍で実施方法が経験者から引き継がれていない不安を抱えながらではあったが、保護者の意気込みは強く、夏休み中も何度も集まり準備をしてくださった。当日も30名以上の保護者の力が集まり、食品販売を成功させることができた。

５　文化祭支援委員会の活動

これは、保護者・卒業生・地域を結びつける組織で、同窓会、PTA、野球部OB会、自治会からなる。10年以上前から同窓会が文化祭で出店し文化祭の支援をしていただいていたが、コミュニティ・スクールができた頃に委員会として組織された。これは他の学校にない組織であろう。主に文化祭で出店をし、収益金は学校に寄付される。図書館の書物購入や同窓会館の修繕費として使われている。今年はコロナ後初めての調理を伴う出店に挑戦をした。夏休みに支援委員会の会議、その後消防署へ火気使用の届け、仕入れ、調理器具の調整など学校とは別の組織として連携して細かなところまで段取りが組まれている。前日には中央公民館で保護者がマドレーヌの仕込みをした。当日は猛暑であったが、おいしい匂いに多くの生徒、来場者が引き寄せられ大盛況だった。

マドレーヌ作りの様子

９月の文化祭・学校支援委員会の様子

６　おわりに

これまでに12,000名を超える卒業生が社会へ羽ばたき各分野で活躍している。50年の歴史の中で生徒指導に力を入れた学校改革、少子化に伴う募集人員確保など、決して平坦にはいかない時期もあったが、保護者や卒業生の支えがあって浦安高校の歴史が作られていることを痛感している。

教頭として、保護者や卒業生等にできるだけ多く来校していただけるよう、早めに開催通知を送るよう心掛けている。また、学校に来ていただいている時間が有意義であったと感じていただくために、自分自身が一人一人の方と会話をして交流を深め、学校を知ってもらい、時には学校運営のヒントになることをいただけるよう、その交流の機会を大切に過ごしている。

浦安は漁師の心意気が根強い地域である。明るく、人情味あふれ、お祭り好きな方々が、「浦安高校が好きだ」と学校のために足を運んでくださる。「何かできることはないか」「一緒にやろう」と、現代では難しくなった人と人との繋がりの中で、私も浦安愛を持って生徒を支えていきたい。

学級を創る

「笑顔あふれる学級」を目指して

多古町立久賀小学校教諭　高橋（たかはし）　志穂（しほ）

1　「笑顔あふれる学級」を目指して

笑顔は子供たちの心が開放されているかどうかを確かめる一つのバロメーター。安心して自分の力を発揮できる空気が教室にあるかどうか。その空気に敏感でありたい。だから「笑顔あふれる学級」が毎年、私の目標だ。

⑴当たり前だけれど大切な「上機嫌力」

「この先生の学級は、いつもすばらしいなあ。」そう思う先生は、共通していつも、楽しげだ。笑顔が生まれるような実践を仕組むことはもちろん有効だけれど、もう何も考えずに担任が笑顔で子供たちと接することが、まず一番なのではないか。それが、何より子供たちの安心感につながると。現実には、教育現場では様々なことが起こり、明るくにこにこ穏やかにしていることが難しいと感じることもある。でも子供たちの背景には、もっと様々な家庭環境があり、中には家で居場所のない子や、親に甘えたくても甘えられない子もいる。そんな時に、学校に来て、学級に来れば安心できる、そんな場所であるためにも、担任はやっぱり笑顔でいたいなと思う。

⑵大切なのは「伸びたか伸びないか」

子供たちの「やった！」「できた！」の笑顔のガッツポーズを一緒に喜べる時は、教師として本当に嬉しい瞬間。私は、子供たちに、「できたか、できないか」ではなく、「伸びたか、伸びないか」を大切にするということを繰り返し話す。そして、一人一人の頑張りの過程や進歩を、何とか見逃さないように全力で見とる。「時間がかかっていた計算問題が、今日はすらすら解けたね！」「前よりもスムーズに読めるようになったね、すごいよ！」「発表の声が大きくなってきたよね！成長しているね。」たとえ小さな伸びであっても、教師がポジティブにフィードバックする。そうやって小さな伸びを価値づけることで、子供たち同士でも友達の頑張りや伸びを見つけ、応援し、一緒に喜べるようになると信じている。その風土が根付くと、学級の雰囲気がぐんとよくなり、子供たちの笑顔が増えることは間違いない。保護者にも折に触れ、懇談会や学級通信で場面を拾って、この思いを伝えている。家庭の追い風があれば、効果も抜群だ。

⑶安心して失敗できる　～ドンマイ！～

「伸びたか伸びないか」で評価する価値観が浸透すると、失敗を学びの一部としてとらえることができる。間違え（失敗し）て、考えて、そうやって成長しようねと笑い合う。子供たちには、自分の失敗談をたくさん話す。私はもともとおっちょこちょいなので、失敗談は尽きない。クラスの誰かが失敗すると、すかさず声を揃えて明るく「ドンマイ！」の声が響く。「志穂先生が、一番ドンマイが多いよね。」どの学級を担任しても、たいがい子供たちから言われる。失敗の姿を見せたり、間違ったら「ごめんね。」と謝ったりする大人の姿を見せることも、子供たちの安心につながるのかも。

⑷エンブレム＆合言葉をつくろう

こんな学年、こんな学級にしたいという担任の思いを込めて毎年作る。学年通信のネー

ミングもこれで。行事や学年・学級の活動でおおいに活用！拡大して教室に掲示。印刷してシールにしたり、ラミネートしてカードにしたりして、とっておきのときのプレゼントにすると、子供たちはとても喜ぶ。学級に対する思いや学級全体の連帯感を高める一助に。１年間が終わるときには、このエンブレムが学級みんなの宝物になっている。

合わせて新学年のスタートには、どんな学級にしたいかを話し合い、その実現のためにどうするかを合言葉として決め、掲示。合い言葉が飾り物になってしまわないよう「みんなで決めた私たちの合い言葉」という意識を根付かせることが何より大事。行事等ことあるごとにこの合い言葉に返り、めあてをもち、振り返りをする。子供たちにとって本当の意味での大切な「合い言葉」になっていくため。

ちなみに今年度は持ち上がりの４年生担任。３年生では「キラリと光るいいところ　いっぱい見つけてぐんぐんのびるよ！」。今年度は、SUPERキラりんズに進化し、「キラリと光るいいところ　みんながみんなを応援します！」が合言葉。お互いの頑張りを応援し合える学級にしていこうと、日々奮闘中。

⑸話合い活動＆学級集会で子供が育つ！

子供たちは、楽しいことが大好き。「仲よくすること」「協力すること」の大切さについて、言葉をたくさん並べて説明するよりも、実感することが一番。自分たちで話し合い、みんなで決めたことを協力して実践する。成功体験、満足感、達成感を得る活動を積み重ねることで、子供たちは自分も期待されている仕事がある、必要とされている、学級にとって自分は大切な存在であることに気付く。学級への満足感も高まり、互いによさや違いを認め合える人間関係を築くことができる。「本当に楽しかった」と思えた後の子供の顔は、とてもすてき。「みんなでやって楽しかった」「やってよかった」という経験をたくさんさせたい。課題も次に活かせる。話合い活動、学級集会は、子供が変わる、学級が変わる、「人間関係作り」の絶好の機会だと実感している。だから、意図的に仕組んでいく。

⑹がんばりを宝物にして積み上げて

学級会で話し合って実践してきたことや、協力して行った行事などみんなで何かを成し遂げたときにメダルや短冊に記入して掲示。自分たちの成長や学級に対する思いが可視化でき、学級全体の連帯感につながっている。

２　おわりに

私が大切にしていることや紹介した実践は、今まで出会った尊敬すべき素晴らしい先輩、同僚、後輩から学び、真似をしたものばかり。真似をし、実践してみて、効果が絶大と実感し、今も続けていることを書いてみた。この原稿を書きながら、その時々のことを改めて思い出し、様々な出会いに恵まれて現在があることを実感した。本当に感謝しかない。

悩みは尽きない毎日だが、プラス思考でこれからも、謙虚に学び（真似び）続けたい。

学級を創る

本音で語り合える集団づくりの工夫 ～思考ツールを用いて～

袖ケ浦市立平川中学校教諭　川上（かわかみ）　加奈子（かなこ）

1　はじめに

現行の学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が改訂の方針の１つに挙げられている。本校の授業を見ても、生徒が対話しながら学んでいる様子が多数見られるようになった。一方で、学級生活を見ていると、仲間に同調するだけではなく、自分の本来の意思を表現しないままに会話をしている場面を見かける。

私は、生徒の学校生活の基盤となる学級が常に「生徒一人一人が本音で自分の考えを語り合える場」としたい。学級で多くの語り合いができることで、自ずと生徒相互の磨き合いや高め合いが生まれ、その繰り返しの中で、生徒個々の自己実現につながると考えている。

そこで、ここでは今年度の学級開きから９月まで、主に思考ツールを用いて行った学級での「語り合える集団づくり」にむけた実践を中心に紹介をしたい。

2　学級の実態

本校は、全校生徒208名、第３学年は75名と小規模校である。本学級（３年２組）は男子22名、女子15名の計37名で構成されている。生徒は地域の２校の小学校から進学しており、その関係性を中学校でも引きずることが多く、交流関係が広がらない。穏やかで内向的な生徒が多く、自己表現を得意とする生徒が少ない。学級で自分の考えや想いを伝える場面では躊躇する生徒もいる。

3　具体的な実践

⑴4月の学級目標づくり

４月の学級目標づくりでは、小学校からの仲間や初めて同じ学級で過ごす仲間と、様々な考えや想いを共有し合った。自己表現の第１段階として、「自分の考えをとにかくアウトプット！」ということを目指して「ブレインストーミング」と「KJ法」を用いた。「どのような学級にしたいのか」「どのようなことを一人一人が心がけるべきか」について、小グループ内で考えを出し合い、意見を整理した。「みんなが笑顔」・「勉強に集中」・「行事は全力」・「最高の思い出」など、多くのキーワードが並んだ。生徒の内に秘めている前向きな想いはまだまだあると感じた。この時間は、最終的に「希望の進路実現」「後輩の手本」「全行事に全力投球」の３つに集約され、スローガンは「一笑懸命（いっしょうけんめい）」に決定し、今年の１年間がスタートした。

⑵修学旅行の取組

①出発前の取組

５月には中学校生活最後の体育祭があった。その後の待ちに待った修学旅行の取組では、自己表現の第２段階として「多くの情報に重要度をつけて整理しながら語り合う」ことを重視して「ピラミッドチャート」の方法を用いて取組目標を立てた。班での話し合いでは、重要度の決定のために自分の考えを述べる姿が多く見られた。最終的には「今日と（京都）いう日を大切に」という取組スローガンとともに取組目標を決定し、そのための役割分担

等の確認をした。同じ言葉でも、そこに重要度を加えたことで、会話に深まりが見られた。

②帰着後「思い出」を語り合う場面

帰着後、学級の取組スローガンのとおり「大切な思い出」が何かを語り合う時間を設定した。この中で、一昨年度、校内研修で南房総教育事務所の三浦貴子指導主事（現　富津市立吉野小学校長）をお招きした際に学んだ「○○は、○○となって、○○となって、○○となる」という文型に当てはめて考えさせた。

生徒が発表した言葉の中には、

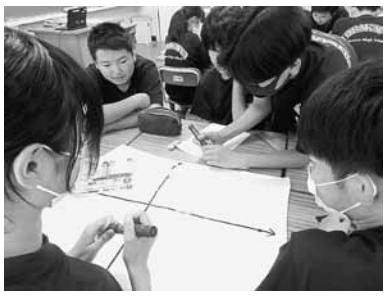
「修学旅行は、皆が笑顔となって、一生の思い出となって、宝物となった」

「修学旅行は、素晴らしい経験となって、かけがえのない時間となって、己の成長となった」

等、全員の言葉に個性が表れていた。それと同時に、子どもたちが少しずつ自信をもって表現できるようになった。

⑶７月「前期前半の学級の振り返り」

７月の夏休み前の学級の振り返りでは、自己表現の第３段階として、班ごとに「座標軸」を用いた。縦軸は「人間関係」、横軸は「きまり」として、丸いカラーシールを貼り、付箋やメモ等を用いずに「自分の言葉で理由を述べる」活動とした。最終的には班で話し合う中で合意形成し座標点を決めた。班の最終的な座標点を決めるにあたり、一人一人の生徒が自ずと自分の意見や仲間の意見を聞き合って決定する様子が見られた。



⑷９月「合唱祭の取組目標」

９月には11月の合唱祭に向けた取組目標を考えた。合唱祭は中学校生活最後の大きな行事であるため、多くの成功体験を積ませようと「フィッシュボーン」を用いて多方向から合唱祭の取組を考えさせた。学級での話し合いの結果、「チームワーク」・「気持ち」・「全力」・「練習」という４つの取組の柱が決定した。具体的な手立てについての話し合いの場面では「互いに意見を伝え合う」や「頑張った仲間を認める」といった意見が出された。歌唱が得意・不得意だけではなく「リーダー性」や「計画性」など「自分の長所を学級のためにどう生かすか」という視点からの発言に変容した生徒が多く見られた。さらには、自己表現を苦手としている生徒も、自分の言葉で語れるようになっている様子が見られた。

この後、合唱練習が開始された。毎日の学級練習の終わりにローテーションで一人一人が「思いを語る」こととなった。初日の生徒の語りとそれを聞き入る全員の姿から「本音で語り合う」学級に近づいていると感じた。

４　今後に向けて

学級は生徒にとって最も身近な社会である。様々な集団活動を通して、多様な人間関係の築き方や、よりよい自分を追求することなどを学ぶ。今後も、引き続き様々な思考ツールを活用しながら「本音で語り合う」集団づくりに努めるとともに、生徒の自己存在感、学級への所属感を高め、一人一人が「自己実現」できる環境づくりに向けて努力していきたい。

学級を創る

自己実現ができる学級づくり
～個人と集団の成長を往還させる教師の働きかけ～

松戸市立旭町小学校教諭　杉本（すぎもと）　一生（かずき）

1　はじめに

先生方は、「教育とは何か？」と問われたら、何と答えるだろうか。私は、教育とは、「日本の未来をつくること」だと答える。目の前の子供たちが成長し、将来の日本や世界を創っていく。では、「学校の役割とは何か？」前述の視点に立つと、学校とは、子供の可能性を広げる場でなくてはならない。そのためには、子供たち一人ひとりが、授業や学級での生活において自己実現を果たしていくことが重要になると考える。マズローの欲求５段階説では、自己実現欲求が最上層に位置付いている。人の行動原理には思いや願いがある。それは発達段階に応じて、質の差はあれども、子供たちも同様である。本稿では、子供たちが自己実現を果たしていく学級経営の具体例をいくつか紹介する。

2　学級は自己実現の場

⑴目指すゴールを共有する

自己実現を図るために大切なのは、個人と集団の関係性である。どの学年、学級でも年度初めに学年目標や学級目標を決めると思うが、教師から提示することなく、必ず子供たちと話し合いながら決定していく。同時に、学年会で教師の思い、懇談会で保護者の思いを共有し、子供たちにも伝えている。そのため、例年５月中旬～下旬に決定する。一見遅いように感じるかもしれない。しかし、４月当初に、教師から提示すると、その目標には子供たちの思いや願いは一切反映されていないため、子供自身のゴールが曖昧になる。学年目標や学級目標という大きな目標は、行事の目標、月毎の生活目標、そして個人の目標にも紐づいてくる。また、自分たちで決めた目標に対して、集団・個人でもふり返りが可能となり、個々の思いや願いを更新することができる。時間をかけてでも、子供たちが丁寧に話し合い、ゴールを設定していくことが重要になる。

写真１　学級目標決めの板書

⑵係活動を通して自主性を育む

小学校学習指導要領解説特別活動編では、当番活動と係活動は明確に区別されている。係活動は、学級生活を共に楽しく豊かにするために創意工夫しながら自主的、実践的に取り組むことができる活動である。

私は、係活動を会社形式にしている。子供たちが、「あれば学級が少しhappyになる会社」を設立する。求人募集を出し、それに賛同する友達が参加して活動していく。子供たちが、活動期間や活動内容を決め、定期的にミーティングを開催し、活動のふり返りと今後の活動の方針や新しい活動を創造していく。例

えば、教室を装飾で彩るデザイン会社や自作の４コマ漫画で楽しんでもらおうと考える漫画会社など多様な会社が生まれてくる。このように係活動は、一人一人の個性（よさ）が集団のために生かされ、他者から認めてもらえる絶好の機会になる。個人の自己実現欲求は、他者からフィードバックを通して満たされていく。こうした個人の自己実現は、他の活動へも波及し、当番活動、イベントの企画、子供が展開する授業等の創意工夫にも繋がっていき、集団の質を高めていくことができる。

写真２　係活動（会社）のミーティング

⑶授業と学級経営の関係性

私は、若手の時に学級経営が上手くいかないために授業も上手くいかないと悩んでいた。つまり、学級づくりで素地ができていないと対話的・協働的な学びは実現しないと考えていた。しかし、今では全く逆の発想だったと感じている。対話的・協働的な学びでは、コミュニケーションとインタラクションが活発に生じ、学級という学びの協働体が形成されていく。両者は双方向の関係性にある。１日の大半は授業であることを考えると、年間約1000回の授業を充実させていくことが学級経営の基盤づくりになっていく。

一方で、全ての授業を質の高いものにしたいが、現実的には難しい。そこで、自分が得意な教科に注力して授業づくりを頑張ってみることが大切だと考える。各教科等の学びには通底するものが多くあるため、一点集中で教材研究を行うのも良策と考える。個人的には、総合的な学習の時間（以下、総合）をおすすめする。総合は、身の回りや地域の課題に対して、各教科等の学びを総動員して課題解決を図りながら自己の生き方を考えていく学習である。多様な他者と関わり、社会参画を図る過程で、学校の枠を越えた自己実現がなされていく。総合での学びや経験は、個人や集団の成長に大きな影響を与えている。

３　教師は余白をつくる

これまで紹介した実践には、子供たちに余白を与えるという共通点がある。余白の具体としては、子供たちが意思決定をする思考の余白と学級をデザインする環境構成の余白である。２つの余白を生み出す方法については、例えば、教師が指示していたことを我慢して、意図的に抜いていくことで子供は考えるようになる。また、教室環境を教師が決めすぎない、整えすぎないことで子供たちが居心地の良い教室環境をデザインするようになる。

子供の学びは青天井である。教師として大切なマインドは、「せねばならない」よりも、子供たちの思いや願いを大切にした自己実現の場を工夫することだと考える。

４　おわりに

子供たちには無限の可能性があり、成長に終わりはない。それならば、私も子供とともに成長する教師であり続けたい。日本の未来をつくる最前線に私たち教師がいる。子供の学びを大切にしながら、県内の先生方と手を取り合い、日本の未来をつくっていきたい。

学級を創る

“誰一人取り残すことのない学級経営”をするために

柏市立柏中学校教諭　村政（むらまさ）　雄輝（ゆうき）

1　はじめに

初任時は３年生の副担任だった。４月の始業式、生徒と出会う初めての記念すべき日。多数の男子生徒が髪を染色し、制服のボタンを全開にして登校してきたところを、学年、学年副、生徒指導の主任が、昇降口で指導する場面から始まった。

もし、私があの当時、学年主任だったとしたら…。あの学年経営はできる気がしない。この３年生は卒業式の日、担任数名が生徒指導で不在の中、学級委員が全て指示を出し、整然と整列していた。指導されていた生徒も思い残すことはない晴々とした表情で式に参列し、見事な卒業式となった。さらに式後、普段通りに全学級が帰りの会を行い、振り返りをしていたのが強く印象に残っている。

当時の学年主任の学年経営・学級経営に影響を受け、今の教育観・指導論につながっている。

2　失敗から学ぶ

２年目、初めての担任は１年生。男子は表面上だけの私との人間関係であり、女子は話を聞けば聞くほど、指導すればするほど、離れていった。体育祭の学年種目で１位を取って、合唱コンクールで最優秀賞を取っても、学級がまとまることはなかった。生徒たちの手で掴み取ったものではなく、私がそうしたくて力ずくで取らせた。そう思われていたように感じる。

前年度、副主任だった先生が学年主任となり、隣の教室の学級担任となった。その学級の雰囲気の温かさ、生徒たちの表情を見ると、自分の力の未熟さを痛感した。

「どうすればこうやって生徒が躍動する学級が作れるのだろう…。」この先生に相談した。

「前年度の学年主任の姿を思い浮かべてごらん。」記憶に残っていたのは、とにかく生徒個々とよく話をしている姿だった。そして、話し終わった後の生徒たちの表情が変わったことだった。「あれは、ただ説教されたり、助言されたりするような話の内容じゃなかったのかな…。」と気になり、卒業生が来校した際に聞いてみることにした。話の内容は「あいつ、最近元気ないけど何かあったか？」「頼みごとがあるのだけど、やってくれないか？」「お前のおかげで助かった。ありがとな。」というものだった。

学級経営とは、体裁を整え、高圧的な指導で生徒を矯正していくものだとばかり考えていた。「手はお膝」と私自身も育てられてきた。この話を聞いたときの衝撃は大きかった。この時初めて「生徒と生徒の人間関係を結びつける」ことが学級経営に大きく影響しているのだと知った。そして、それは学級の雰囲気を良くするだけではなく、授業態度が良くなり、学力向上にもつながり、誰もが安心して過ごせる教室になっていくことを、実践を以て体験した。

「学級経営とは、個別指導だよ。」

初任時の学年主任の言葉が、今につながっている。

3　学級開き～10日ですべてが決まる～

⑴学級開きまでにすること

①学年会議で「班づくり」「学級組織づくりの手順」「朝・帰りの会のプログラム」「朝・配膳・清掃の時間の教員の配置」の承認を学年職員から得る。
②机・椅子の個数、落書き、環境物の確認。
③引継ぎ事項に目を通すが、先入観は持たない。初日にどんな言葉をかけるか想定しておく。
④学級の生徒一人一人に手紙を書く。（これまでの担任とは違うな…と思わせる。）
⑤初日の段取りを想定しておく。

⑵学級開き初日

①一年を見通した「目指す学級像」を語る。
②全員と対話することを目指す。
③前日に書いた手紙を一人一人に渡しながら、ひたすら名前と顔を覚える。
④時間厳守。（担任はいるだけ。誰が呼びかけるか様子を見ておく。）
⑤帰りの会を班隊形で行う。（教師主導で良い。“笑い”のある雰囲気で終わりたい。）
⑥仮班（便宜的な班）の期限を説明。
⑦翌日の連絡と欠席生徒への連絡を密に。

⑶学級開き２日目～10日目

①自己紹介（自分の名前の呼び名の決定）
②クラス会議実施の承認を取る。（自分たちで話し合い、決めて、実行するってすごいクラスじゃない？と語る。）
③話し合いのルールづくり。（担任が“話を聞くときはこうだよね？”と提案してはいけない。）
④スタート班づくり。（誰が動くのか、誰が何もしないのか、誰が浮いてしまうのか人間関係を探る。）
⑤生活記録ノートから個々の悩みや思いを探る。コメントを必ず書く。
⑥朝・帰りの会のプログラム編成。
⑦朝・帰りの会の班会議に担任も参加する。
⑧週直、当番の仕事を確認。（一緒に行う）
⑨提出物の回収を確実に行う。
⑩基本的な生活習慣の徹底。時間厳守。
⑪空き時間に授業中の様子を見に行く。
⑫いじめと危険行為以外では叱らない。
⑬雑談の中で個々の学校生活における充実感を探る。（全員との対話を目指す）
⑭欠席生徒、登校をしぶる生徒には家庭訪問をする。本人・保護者の思いを聞く。
⑮学級目標、正式組織・班の決定。
これらを学年、一気呵成に行う。

4　おわりに（学級開き10日目以降）

どの学年も、清掃、授業態度、朝・帰りの会の進め方、時間厳守について、時期やタイミングを考えて厳しい指導（叱る）をする。それらは演技で良い。（生徒には気づかれないように）

学級が初日から荒れていることはなく、日々の生活の繰り返しの中で生徒、担任それぞれに我儘が出てくるものである。そういった綻びが出てきたときに、それに気がつき、修正（叱咤激励）できるかが担任として大切な力となる。外見や表面的なことになりがちだが、そこは一歩譲って寛容な心で、内面的な指導であると良い。教育実習が楽しいのは、この修正場面を経験しないからである。

担任はいつか必ずこの場面に直面する。この叱咤激励を境に伸びる学級と停滞する学級があるのは事実である。

担任は、一年間を見通して、生徒の育成に何が必要かを考え、学級経営を進めていく責任がある。

学級を創る

すべては子どもたちのために ～学級経営を生かした「授業創り」～

山武市立日向小学校教諭　髙梨（たかなし）　晃一（こういち）

1　はじめに

本校は、学校教育目標「豊かな心を持ち、自ら学び考え、たくましく生き抜く児童の育成」を柱として、児童も教師も安心・安全に夢中を楽しむ学校を目指している。その上で、担任一人ひとりの学級経営は大切な位置づけである。また、「授業を創る」上でも、学級経営の質を高めることは重要課題であると考える。

私が学級経営を進めていく上で、大事にしていることが、「すべては子どもたちのために」という信念である。この考えを基本に、以下に実践していることを記していく。

2　実践内容

⑴ICTの活用

①電子黒板の活用

本校は、令和３年度に統合し、今年度で４年目を迎える。開校当初から、国内でも珍しい壁に備え付けの電子黒板が設置されている。電子黒板は、ワンタッチで字の太さや色を変えること、直線や図を描くことができる。また、知りたい情報を調べて提示したり、フォルダに保存した教材や挿絵などを自由自在に貼り付けて提示したりすることが可能である。これらの機能に加えて、一人一台端末との連携もよりスマートにすることができる。

②一人一台端末の活用

本校は、昨年度、文部科学省からリーディングDXスクールの研究指定を受け、一人一台端末の効果的な活用方法について研究を進めてきた。以下に実践内容を紹介する。

㋐個別最適な学び

児童の端末内にデジタル教科書や自習用アプリを導入し、個々の実態に合った学習を自己選択・自己決定しながら進めている。

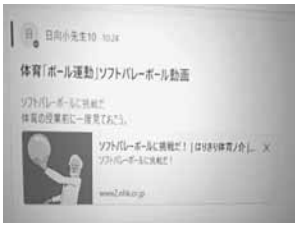
㋑協働学習

グループ内でドキュメントを共有し、同時に編集することができるツールを活用することで、役割分担に基づいた学習ができる。考えをまとめたり整理したりする際には、思考ツールを活用することで、自分の考えを明確にし、話し合いを通してより理解を深められる。

㋒反転学習

授業内容に関する学習事項を事前にMicrosoft Teamsアプリ上に上げて、前もって学習をすることで、授業内に問題解決、グループワーク、ディスカッションなどのアクティブラーニング活動に時間を使うことができる。

以上の実践から、一人一台端末を活用することで、デジタル社会で生きていくための基盤を学ぶことができていると考える。



⑵学級通信の活用

①学級通信の目的

学級通信の主な目的は、学校生活での出来事や自分の成長を振り返る場として活用することである。また、保護者に対して学級の状況や児童の成長を報告し、学校と家庭の連携

を図りたいと考えた。そして、何より学級や児童に対する担任の想いや考えなどを知らせることである。これらのことから、学級通信の発行を通して、担任自身が学級の様子をより深く理解し、学級や家庭にその想いを広げることができる。さらには、児童同士、児童と担任、児童と保護者の関係性がより深く築けるのではないかと考え発行している。

②授業創りに活かす

学級通信の内容は、日々の学校生活での出来事を中心に記事を書くことが多い。それに加えて、児童自身の学習した内容や感想文、作文などを掲載するようにし、「授業を創る」ことにつなげている。また、保護者に、授業の進捗状況や児童の反応を知らせることで、家庭でも授業の内容を話題にしてもらうことができる。授業の意図や価値を理解してもらうことで、家庭での学習支援がより効果的になり、保護者との協力関係が深まると実感している。

③学びの深まり

学級通信に、児童の学習の様子や学びの成果を掲載することで、児童自身が「授業を創る」プロセスに関わっていることを実感させることができる。また、学級通信を通して、児童同士の意見や感想の共有を図ることができ、クラス全体の学びが深まっている。

⑶外部人材の派遣要請

①いろはde歴史

「楽しく歴史の学習を進めていくために」という願いから、千葉大学教育学部教授松井聰先生をお招きし、御指導をいただいた。いろは……の順番が時代の古い順になって作られた「いろはde歴史」カルタを使い、これをすべて覚えると、たちまち歴史の流れが頭に入るという教材である。さらに、友達と関わりながら学習することができるので、児童は楽しく歴史の学習を進めることができた。

②アスリートから学ぶ

「夢をもつこと、楽しく運動に親しむこと」の大切さを学ぶことを目的に、新体操パフォーマー亀井理恵子さんをお招きした。元日本チャンピオンの超人技を実際に見たり、体の巧みな使い方などを丁寧に御指導していただいたりした。自己管理の仕方や夢を叶えるために継続的な努力を積み上げていくことの重要性などを学ぶ機会となった。二学期には、夢チャレンジプロジェクトの団体である千葉ゼルバ、千葉ジェッツの選手をお招きし、プロの選手の方との交流を通して、さらに夢について考えさせていきたい。

3　おわりに

担任として、児童が居心地のよい環境を整備すること、児童との信頼関係の構築、保護者との連携強化、これらが基盤にあって初めて授業が成立する。児童・教師・家庭が共に学ぶ方向をそろえていくことで学級全体の学びが深まり、授業が創られる。

「すべては子どもたちのために」。教師になりたてのころに抱いたこの信念を忘れずにこれからも子どもたちと共に成長できる教師でいたいと強く思っている。

すべては子どもたちのために

「先生、今日は『あいだ』ないんですか？いつも楽しみにしてるんですよ。」
と、A・Mコンビ（その場で名づけました）に聞かれました。
この言葉から『あいだ』を心待ちにしている人がいることを知り、とても嬉しい気持ちになりました。それと同時に、「クラスの子どもたちのためにもっと頑張らないとな。」と感じました。
先生も人間です。「面倒くさいな」、「明日やればいいか」などと、忙しさを理由に現実逃避（とうひ）してしまいたくなることがあります。しかし、そんなときに自分を奮（ふる）い立たせてくれるのは何かと考えたとき、浮かんでくるのは、「家族」、「仲間（友人や同僚）」、そして「キミたち」の存在です。もちろん、自分がもっている目標や信念のような心の部分も大事ですが、やっぱり「自分に関わる人たちのため」というのが大きいように思います。学校でみんなと過ごしていると、子どもの純粋な瞳や笑顔、何事もひたむきに取り組む姿などたくさんのパワーをもらっています。そのパワーが先生の頑張る源（みなもと）になっていることは間違いありません。
「すべては子どもたちのために」。先生が教師になったときに、最初に抱いた信念です。その信念は今でも変わりません。これからも、自分に関わる人たちのために自分の信念をつらぬき通すことのできる教師を目指したいと思います。
ということで、１週間ぶりの『あいだ』ですが、これからもお楽しみに。
（夏休みまでに４０号いけるといいなあ。と心の中では思っています。）

【学級通信「あいだ」第32号より】

国語　自ら表現様式を選択し継続して表現する児童の育成
-個別最適な学びを大切にする新聞づくりを通して-

東金市立東小学校（前大網白里市立大網東小学校）教諭　加藤（かとう）　美幸（みゆき）

書くことの学習では、身に付けた表現様式を選択して活用することが十分に指導されていないことや、教師が書き手の想いに寄り添えていないことが課題として挙げられる。そこで、新聞を書く活動を通して、表現様式を児童が選択し自在に文章を書き分ける力を育てるとともに、書き手を尊重した学習指導過程や学習支援の在り方について明らかにすることを目標に研究を行った。その結果、表現様式を自在に扱う場を設けたことで目的や意図に応じて意識的に書き分ける力を育てることにつながるだけでなく、書き手に寄り添う授業づくりを通して、主体的によりよい文章となるように推敲する力が高めることができた。今後、この成果を研究報告会で積極的に紹介し、授業づくりに活かしていく。

社会　主体的に学び、仲間と協働して納得解を導き出そうとする児童の育成
-社会科学習におけるICTの活用を通して-

大網白里市立大網小学校（前山武市立成東小学校）教諭　南部（なんぶ）　伊織（いおり）

中央教育審議会は、今後の教育活動の在り方について「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図る必要があるとまとめている。しかしICT活用において、上記のような活用方法は未だ明らかにされていない現状がある。そこで、小学校社会科第４学年「自然災害からくらしを守る」の単元において、反転授業を導入し、家庭におけるTeamsのチャネル機能を活用した授業実践を行った。その結果、児童は次時に向けた家庭での調べ学習や、友達との意見交換等の個別最適な学びを充実させ、その成果を授業内の協働的な学びに生かすことで、学習内容をより深めることができた。反転授業の実践知が少ないことからも、上記のような実践方法の活用を広めていきたい。

算数　図形の性質を活用して数学的な見方・考え方を働かせる児童の育成
-第５学年「面積」の指導を通して-

市原市立光風台小学校（前袖ケ浦市立中川小学校）教諭　池永（いけなが）　卓司（たくじ）

学習指導要領の改訂に伴う図形の性質の扱いの変化と、数学的な見方・考え方に関する意識調査から、図形の性質を活用するときにどのような数学的な見方・考え方が働いているのかを位置付けた上で、授業改善をする必要があると考えた。小学校算数科第５学年「面積」において、「図形の特ちょうシート」を用いて図形の性質を活用し、学習活動を段階的に設定して「OPPシート」等を用いた振り返りを行う検証授業を行った。その結果、多くの児童が図形の求積場面で図形の性質を活用し、数学的な見方・考え方を働かせることができるようになった。他の単元や学年においても、児童が図形の性質を活用し、数学的な見方・考え方を働かせることの研究と教材開発を継続して行い、手立てを一般化したい。

図画工作

題材の評価規準から児童の姿をイメージ・共有することの有効性の検証
-下学年の造形遊びにおける実践を通して-

市原市立五井小学校（前水の江小学校）教諭　佐久間（さくま）　洸一（こういち）

学級担任として、図画工作科の指導と評価に自信がないという課題を感じていた。そこで、同じ題材に取り組む学年の教師たちと六つの題材で授業を実施し、題材の評価規準からあらかじめ児童の姿をイメージ・共有することの有効性を、３点明らかにした。

①教師が授業中の児童の姿をより見取りやすくなること、②授業後、教師がドキュメンテーション（エピソード記録と写真）にまとめることで、児童の学習状況評価につながること、③児童の姿から教師の授業のねらいの明確化、授業改善につながることである。

今後、本県の子供たちの図画工作科における資質・能力をさらに育むため、教師の授業研究の一つの方法として、各学校に広めていきたい。

体育

コーチングスキルを活用した自己効力感を高める体育学習の在り方
-ベースボール５の教材化を通して-

香取市教育委員会指導主事（前栗源小学校教諭）　椿（つばき）　琢磨（たくま）

体育を通して、学習指導要領で求められている予測困難な時代を乗り越える力を児童にどう育むのか。そう考え、「ベースボール５」を教材化し、小学校第３学年を対象として、教師から児童、児童相互のコーチングを活用した授業で「できる見込み感」と定義される自己効力感を高められるか検討を行った。実践的なコーチング方法を座学で学び、児童が理解した上でゲームにて使用した。また、コーチングの使用数を記録したり、称賛やアドバイスを行ったりする活動を取り入れた。その結果、自己効力感、児童相互の肯定的なかかわり、打撃時におけるより良い状況判断力の向上が見られた。今後は、本研究で得た成果を研修会等で周知していくとともに、他単元における有効性の検討を進めていきたい。

技術・家庭

先進的な情報技術とのつながりによる技術観の育成
-スマート農業におけるドローン技術の活用に焦点を当てた学習を通して-

八千代市立勝田台中学校教諭　熊谷（くまがい）　光朗（みつお）

生活や社会と共に変化し続けている先進的な技術の在り方を、子供たちが自分事のように考えられることが必要であると考える。そこで、スマート農業のドローン技術に焦点を当てた先進的な情報の技術とのつながりを意識した題材の工夫と学習過程を開発し、多様な側面に立って自分事として技術の在り方を考える技術観の視点に立った実践の効果を検証した。その結果、実践による生活概念の再構築や学習を通した経験と学びを関連付ける発達過程を辿り、環境への影響、職業、労働環境、エネルギーなど、多様な社会的側面とのつながりの中で先進的な技術の在り方を考え、自分なりに意思表明できる技術観を育むことができた。これからも、様々な先進的な技術を扱った実践を行い、検証していきたい。

外国語　中学校英語授業におけるリテリング指導
-プランニングからリプロダクションにとどまらない再話を目指して-

柏市立柏の葉中学校教諭　上原（うえはら）　美咲（みさき）

本研究は、読解後のリテリングを自分の言葉で内容を伝える活動にするために、プランニングが有効であることを明らかにした。これまでの実践の中で、生徒の発話が本文の再生に近い、リプロダクションにとどまっていることに課題を感じていた。また、事前調査でリテリング活動をどのように運用し、評価したらよいのだろうかという教師の声や、即興で自分の言葉でリテリングをするのが難しいという生徒の声を聞くことができた。そのため、リテリング前に５分間、キーワードや絵を使って準備するプランニングが有効であるか検証を行い、発話や振り返りの変容を分析した。今後は、この研究をリテリングの実践例として紹介し、リテリングの可能性について伝える機会を設けていきたい。

小学校外国語　話すこと［やり取り］における主体的なコミュニケーション意欲の向上
-第６学年における必要感をもたせたスキットの活用を通して-

浦安市立明海小学校（前富岡小学校）教諭　直枝（なおえ）　祐樹（ゆうき）

小学校の担任をしながら、毎日の外国語科を教える中で、児童が「英語を使って話したい」、「やり取りをしたい」と思うにはどうすればよいかを課題意識としてもっていた。そこで本研究では、スキット（寸劇）を単元内に取り入れた上での、児童のコミュニケーション意欲の効果検証を行った。その結果、児童の「英語を話す能力の認識」が上昇し、それに伴って実際の児童のスピーキング能力も向上した。また、具体的な場面や状況を想定したスキットを取り入れた単元構成によって、やり取りを充実させることができ、「楽しい」「もっと話したい」と思える手立てとなった。今後はスキット（寸劇）をより多くの教員が実践できるように運用可能な方法や単元構成を更に考え、県下に広めていきたい。

道徳　自己の生き方について考えを深める道徳科の授業の実証的研究
-納得解の紡ぎと、ルーブリックを活用した振り返り活動による学習改善を通して-

浦安市立入船中学校（前高洲中学校）教諭　田中（たなか）　大輔（だいすけ）

本研究では、生徒自身による学習改善を図りながら、他者の考えや価値観に触れ、議論を通す中で、納得解を紡ぎ、その納得解に照らして自分自身の生き方を振り返ることで、自己の生き方についての考えを深めるために、中学２年生（２学級）に対し納得解を紡ぐ指導過程と複数時間を通したルーブリックによる振り返りを活用した実践研究を行った。その結果、納得解を基に自己の生き方として実現していこうとする思いや願いをもつことができた。このことから、納得解を紡ぐ指導過程と複数時間を通した生徒自身による学習改善活動は、自己の生き方についての考えを深めることが明らかになった。他学年でも検証を重ね、生徒の学習改善の過程を詳細に分析し、研修会等で報告し、広めていきたい。

現代的教育課題

小学校段階におけるクリティカル・シンキング教育の実践
-教科等横断的な視点でのGoogle Classroomの活用を通して-

野田市立清水台小学校（前七光台小学校）教諭　上園（うえぞの）　雄太（ゆうた）

本研究では、現代社会における情報化の進展と情報氾濫の課題に鑑み、情報を適切に吟味し解釈する能力、すなわちクリティカル・シンキングの向上を目的とした教育手法に焦点を当てた。この研究での目的は、Google Classroomを利用した教科等横断的なアプローチを通じたクリティカル・シンキング教育の効果を明らかにすることである。

具体的には、先行研究を基に効果的な教育プログラムを設計し、実施前後でアンケート調査を行い、学習者のクリティカル・シンキングに関する資質・能力の変化を測定した。その結果、別の教科での関連用語の活用や客観性の向上などの成果が見られた。これにより、学校教育におけるクリティカル・シンキングを高めるための新たな方向性を明らかにすることができた。

特別支援教育課題

知的障害特別支援学校（専門学科・職業コース）における効果的な教育相談の在り方
-「チーム学校」としてスクールカウンセラーを効果的に活用するために-

県立特別支援学校市川大野高等学園教諭　中村（なかむら）　真里（まり）

知的障害や発達障害を有する子供は、二次障害や精神疾患につながるリスクが高いにも関わらず、特別支援学校における教育相談体制やスクールカウンセラー（以下、SCという。）の配置数には課題がある。そこで、知的障害特別支援学校（専門学科・職業コース）における効果的な教育相談の在り方を明らかにしたいと考え、教育相談体制システムの構築やSCと連携した取組を行った。その結果、教職員が生徒を「見立てる力」の向上や「チーム学校」としての体制強化、生徒の課題解決力の高まりが確認された。本研究が、他職種との連携による「チーム学校」としての支援体制の構築を進め、知的障害特別支援学校における教育相談体制の充実に役立てるよう周知していきたい。

企業等派遣

民間企業における社会動向と経営手法の実際の考察

県総合教育センター指導主事（前県立浦安高等学校教諭）　久保（くぼ）　善啓（よしひろ）

今回私がClassi株式会社（以下、同社）での研修を希望したのは、「組織マネジメント」について研鑽を積みたいと考えたからである。同社は、教育系ITベンチャー企業で、業界トップランナーとしての地位を築いている。本研究では、まず、「マッキンゼーの７Ｓ」と呼ばれる組織行動分析モデルをもとに、同社の組織行動について、各個人による情報収集と、ミドルマネジメント機能に着目しながら分析した。特に、「学びのICAPモデル」をもとに、同社の社員の言葉やアンケート調査の結果を検討した結果、目標管理制度の先進的な在り方や組織文化の醸成の取組を学ぶことができた。この成果を今後配属された組織で生かし、生産性の高い学校教育を実現していきたい。

学習者主体の学びを実現するための ICT支援ツール「Ne！クスト」を活用した授業実践

県立特別支援学校流山高等学園教諭　山﨑（やまざき）　慶太郎（けいたろう）

1　はじめに

本校は、職業に関する専門学科を設置する高等部単独の特別支援学校である。学校教育目標は「自らの夢や希望に向かって、挑戦と創造を続ける生徒の育成」と掲げられており、本校のキャリア発達支援の理念を具現化したものである。令和３年度からは文部科学省から「研究開発学校」の指定を受け、生徒が自身の「よりよい未来」の実現に向けて、メタ認知を高めながら自らの学習の調整を行う、新領域「私の時間」（以下、「私の時間」）の研究開発を行っている。

本校は、学校教育目標の実現に向けて必要な資質・能力を育成できるよう、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を重視しながら、「私の時間」を基軸としてカリキュラム・マネジメントを行っている。その中で、生徒がメタ認知を高めながら、自分で目標を設定し、振り返りながら、責任をもって学習に取り組めるようにするため、独自のICT支援ツール「Ne！クスト」（以下、ネクスト）を開発し、運用してきた。本稿では、そのネクストの活用方法や、成果・課題を紹介する。

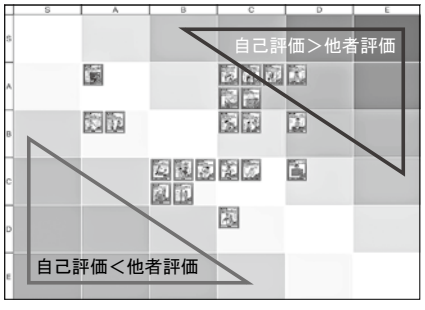
2　学習者主体の学びを実現するために

本校では、卒業生や卒業生が就労した企業への調査から、本校生徒の育成を目指す資質・能力を整理し、それに基づくルーブリック「自立へのステージアップ表」を作成した。生徒が自らルーブリックを活用できるように、平易な言葉の説明と、イラストを組み合わせた独自教材「ステカ」という教材を学習に取り入れている。このステカは、「自己評価と他者評価の乖離」、「自分を俯瞰してみることが難しい実態」、「他者の意見を受け止める力が課題」といった、本校の教育課題を解決するための手立てとして作成されたものである。そのステカをより簡便にかつ効果的に活用できることをねらったのが、ICT支援ツールネクストである。

⑴自己分析・自己理解

ネクストではまず、Ｅ～Ｓの６段階に設定されいる「ステカ」から、今の自分の到達度を選択していく。自己評価が終わった後は、「自己評価」「他者評価」「マトリクス（自己評価×他者評価）」の３つの表を活用し、自分の得意・苦手を分析していく。特に「マトリクス」は、自己評価と他者評価の隔たりが可視化できるようになっており、生徒が「他者から自分はどう見られているのか」という「メタ認知」を高めるためのきっかけ・足場掛けとしている。他者評価については、あくまでも自己分

到達度自己評価の画面



マトリクス表の画面

析を通して自己理解を深めるための指標の一つとして捉えるよう、生徒に説明している。

⑵目標設定

生徒はネクストを活用して自己分析を深めながら、学習の中でレベルアップを目指したい「ステカ」を自分で選んでいく。数は１～３項目とし、前期・後期のそれぞれ半期の目標として設定していく。この時に重視することが「なりたい自分」になるために必要な「ステカ」を選ぶことである。苦手な項目に取り組むことは前提とせず、自分の得意なところを伸ばしていくことも可としている。そうすることで、生徒が主体的に目標設定ができるようにしている。

⑶作戦の検討

目標が決まったら、その目標を達成するための具体的な作戦をネクストの「目標設定シート」を使用して計画していく。作戦を設定するにあたっては、「どの授業のどんな学習活動の場であれば、目標達成に向けた学習ができるのか」や、「作戦は具体的且つ実現可能なものとなっているか（達成のためには長い時間が必要、お金がかかる等）」といった視点を重視している。

目標設定シートの画面

また作戦を立てるときは、必要に応じて友達や教師に相談し、作戦を修正したり、作戦の選択肢を増やしたりできるようにしている。

⑷個別の指導計画・教育支援計画へ接続

目標と作戦が決まったら、生徒が担任と立てた目標と作戦を共有していく。そこでアドバイスを受けたり、必要に応じて修正したりしていく。担任が生徒の立てた目標を参考にし、支援が必要な部分について個別の指導計画や教育支援計画に繋げていけるように、作成スケジュールをデザインしている。

3　成果と課題

ネクストを活用し始めた当初、Excelマクロで動くプログラムとなっており、一連の学習は学校のパソコンを使って実施していた。しかしパソコンの台数に限りがあり、一斉に活動することの難しさや、教師による他者評価データの入力や、進級によるキャンパス移動の際のデータ移行の苦労があった。研究開発が進み、現在ネクストはWebシステム化され、データの整理と保管が簡便化した。また、タブレットでの運用が可能となり、ネット環境下であれば時間と場所を問わず活用できるようになった。

また、ネクストで作成した「目標設定シート」は、ポートフォリオとして蓄積することで、「キャリア・パスポート」としての役割も期待できる。

課題は、本校の生徒の実態に応じた機能の改善、他障害種や他校種への汎化を見据えた機能拡張である。実践を積み上げながら、改善策を検討していきたい。

4　今後に向けて

ICT支援ツール「ネクスト」は生徒自身が「学びの主体」となり、「自分の学びを自分で舵取り・調整する」ための支援ツールとして、一定の成果と可能性を示せていると考える。今後は特別支援学校のみならず、他校種で特別支援教育を受ける児童生徒に対しても積極的に活用してもらい、有用性を検証しながら改善を続けていきたいと考えている。

千葉県総合教育センター・千葉県子どもと親のサポートセンター

令和6年度 研究発表会

要申込

千葉の子どもたちの未来のために　～変化する時代に求められる資質・能力の育成をめざして～

対面
先着165名

全体講演・研究発表

2025 2.26 水

会場：千葉県総合教育センター 大ホール

※全体講演または研究発表のみの参加も可能

オンデマンド
先着1000名

全体講演

2025 3.10 月 ▸3.21 金

研究発表

2025 2.25 火 ▸3.21 金

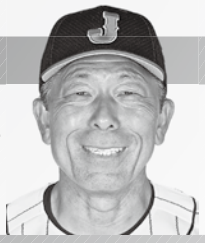
対面参加時の日程

9:25	9:45	10:00		12:00	13:35		16:30
受付	連絡	**全体講演**（開閉会行事を含む）		休憩	**研究発表**（開閉会行事を含む）		

全体講演

演題 「心を育てる」

講師 U-18 野球日本代表監督
（前 日本大学第三高等学校 野球部監督）
小倉 全由 氏



研究発表

01 カリキュラム開発部
生きる力を育てる道徳科授業づくりに関する研究

02 カリキュラム開発部
小学校における自由研究（科学論文）の手引き作成に係る研究

03 カリキュラム開発部
既存の教科と教科「理数」の相互発展に関する研究

04 学力調査部
全国学力・学習状況調査の活用推進に向けて

05 特別支援教育部
特別支援教育における主体的・対話的で深い学びを実現するためのICT機器の利活用に関する研究
～自立活動の視点に着目して～

06 子どもと親のサポートセンター
不登校の子どもの心身変化を的確に捉えた支援の在り方
～子どもと親のサポートセンターの実践からみえてくるもの～

◆申込期間◆
令和6年12月10日(火) ～ 令和7年1月24日(金)　※オンデマンドは令和7年3月21日(金)〆切

◆申込方法◆
下記リンクまたは二次元コードから御申込みください。
https://apply.e-tumo.jp/pref-chiba-u/offer/offerList_detail?tempSeq=36560

◆問合せ先◆
千葉県総合教育センター　〒261-0014　千葉市美浜区若葉2-13
☎ 043-276-1274（担当部直通）　sosecurri_kenkyu@mz.pref.chiba.lg.jp

「全国学力・学習状況調査」結果の活用について

県総合教育センター学力調査部

1　「令和６年度全国学力・学習状況調査」について

「令和６年度全国学力・学習状況調査」が、４月18日（木）に対象学年の児童生徒に対して実施された。今年度は、教科に関する調査として、国語、算数・数学の調査が、質問調査として、児童生徒及び学校を対象に、オンライン方式により生活習慣や学習環境等についての調査が実施された。

＜教科に関する調査結果＞

＜小学校＞	千葉県	全国
国語	67（67）	67.7
算数	63（63）	63.4
＜中学校＞	千葉県	全国
国語	57（57）	58.1
数学	51（51）	52.5

※数値は公立学校の平均正答率（％）を表す。ただし、文部科学省の発表に基づき、全国平均正答率は小数第１位まで、県平均正答率は小数点以下を四捨五入した。
※（　）内は、千葉市を除いた割合を示す。

2　学校全体で分析し、指導改善を推進

校内研修等で、県が活用を推進している３つの分析シートを職員全体で活用することで、自校の成果・課題を発見し、指導の充実・改善のヒントを得ることができる。

⑴教科・質問分析シート

全国、千葉県、自校の結果がレーダーチャートで表示され、自校の状況について一目で捉えることができる。

⑵経年分析シート

全国と比較した自校の結果について、過去３回分の経年による分析ができる。

⑶誤答分析シート

解答類型別に児童生徒の反応率をまとめた文部科学省のデータから、誤答への反応率が高い設問を選定後、誤答を分析し、改善方策を学校全体で協議することで指導改善につなげることができる。

3　指導改善サイクルの確立を目指して

⑴文部科学省発行の調査結果データ・報告書

調査結果データは、地域に向けた情報発信、授業研究などにおける実態把握・根拠データとしての活用、個別最適な学びの実現に向けた活用など、様々な活用方法が考えられる。報告書は分析や指導改善に有効活用できる。

⑵全国学力・学習状況調査活用の手引き

学校内での時期ごとの取組例など、分析や活用の仕方を分かりやすく記載し、学校現場での授業・学校改善に役立つ内容としている。

⑶活用に係る動画コンテンツ

全国学力・学習状況調査の活用を一層充実させるため、動画コンテンツを作成している。制作した動画は千葉県公式セミナーチャンネルにアップし、県内教育関係者が視聴できるようにしている。

⑷活用に関する研修会

県内教育行政担当者が全国学力・学習状況調査の活用方策に関する理解を深め、学校への指導助言等に活用できるよう、オンラインで研修会を行った。

4　おわりに

全国学力・学習状況調査の結果を分析、活用して、各学校の状況に合わせた指導改善サイクルを確立し、学校全体で、授業改善を進めることで、児童生徒の学力向上につなげていただきたい。

県文書館企画展「海を渡った房総の人びと」

令和６年10月１日（火）～令和７年２月27日（木）

県文書館

千葉県文書館は、主に県が作成した公文書や行政資料、県民の方々・団体などから寄贈・寄託を受けた古文書を収蔵している。こうした収蔵文書を中心として、毎年10月から翌年２月にかけて年１回の企画展を開催している。

令和６年は、ペリー来航によって嘉永７（1854）年に結ばれた日米和親条約に基づく開国から170年にあたる。この開国以降、日本人が海外へ行くことができるようになり、海を渡って留学や移住を行う人びとが現れてくるようになる。そこで、今回は明治時代から第二次世界大戦までの時期を対象として房総から海を渡っていった人びとの姿を、資料をもとにして紹介する。飛行機の普及もあり手軽に海外へ行くことができる現在とは違い、船で何日もかけて海を渡っていく必要があった当時、彼らは何を考えて、海を渡っていったのだろうか。今回の展示から、それを感じ取っていただければ幸いである。

１　江戸時代までの海外渡航

ここでは、江戸時代以前に行われていた海外への渡航について、略年表などを用いて簡潔に解説する。また、開国後にベストセラーとなった、福沢諭吉の『西洋旅案内』も展示する。

２　海外を訪問した人びと

旅行や留学などで海外を訪問した人びとについて、残された書簡などから説明する。また、当時使用していた旅行鞄や、人びとを運んでいた船の写真なども展示している。

３　移住した人びと

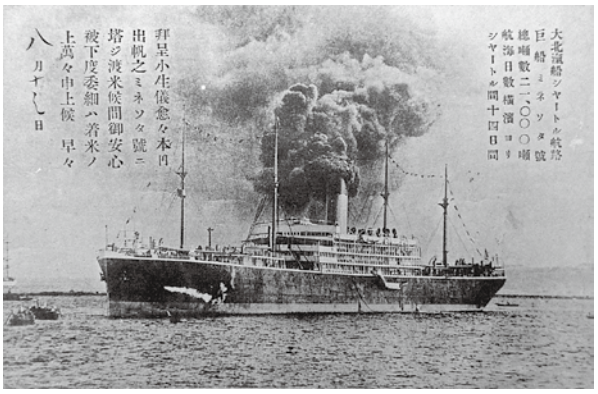
ここでは、海外へ移住した人の姿を、書簡やポスター、当時の絵葉書などから説明する。特に、ハワイ・朝鮮・満州を中心として取り上げ、各地域に房総から人びとが渡っていった実状を見ていく。

４　戦地に赴いた人びと

明治から第二次世界大戦期において、海を渡った人には、留学や移住だけではなく、戦争に動員されて海外に赴いた人びとも存在した。彼らは、何を考えて、戦地に赴き、どのようなことを見聞きしたのだろうか。軍事郵便や当時の写真などを用いて、その状況を読み解いていく。

５　旅券アラカルトコーナー

現在でも、海外へ行くためには欠かせないものである旅券（パスポート）。ここでは、この旅券をまとめて、その変遷などを紹介するとともに、旅券に関連する資料についても取り上げる。



横浜～シアトル間を結んでいたアメリカの旅客船
ミネソタ号＜明治40（1907）年＞

I'mPOSSIBLE

国際パラリンピック委員会公認教材『I'mPOSSIBLE（アイムポッシブル）』日本版

日本パラリンピック委員会『I'mPOSSIBLE』日本版事務局

1　『I'mPOSSIBLE』日本版について

『I'mPOSSIBLE』日本版はパラリンピックを題材に、共生社会の実現に向けて「気づき、考え、行動を起こす」力を育むための教材である。I'mPOSSIBLEという教材の名前は「Impossible－不可能」という単語に「'（アポストロフィ）」を加えた造語で、「I'm possible－私はできる」という意味がある。「'」を加えただけで言葉の意味が変化するように、ほんの少し考え方や工夫をすることで、それまで無理だと思っていたことも、異なる結果に導けるというメッセージが込められている。

2　アニメーションが授業をリードする教材の魅力

教材は小学生版と中学生・高校生版の２種類があり、それぞれ14の授業ができる。授業の事前準備の負担軽減を念頭に、授業に必要な教材はすべて揃え、教師が障害のことをよく知らない場合でも、子供たちの深い学びに繋げられるよう、様々な工夫がされている。

2024年春にはアニメーション教材が加わり、映像が授業を進行することによって、子供たちにとってあまり身近ではない話題や、想像しにくいシーンを効果的に学習でき、教材研究に要する時間もさらに短縮できる。

公式サイトでは、教材を活用した授業実践事例を写真や映像も交えて紹介している。

道徳科や保健体育科の授業に加え、人権教育等、教科を横断して汎用的に活用することも可能である。

木更津第二中学校での授業実践

3　千葉県出身のパラリンピアン『I'mPOSSIBLE』日本版初代アンバサダー香西宏昭選手（車いすバスケットボール）推奨！

香西選手（千葉市立若松小・若松中卒業）は、「社会の環境を変えていくことで誰もが自分のやりたいことに向き合える。そして、それが当たり前のこととしてできる社会であってほしい。」という強い想いのもと、現役プロアスリートでありながら、子供たちの未来を創る活動として、学校訪問や体験授業等を展開している。

千葉にゆかりのある香西選手がバリアフリーをテーマにしたアニメーション教材に登場。次世代を担う子供たちに、共生社会について学び考えることの大切さを伝えている。

アスリートによる学校訪問やパラスポーツ体験などと組み合わせることで、より深い学びにつながると、教材の活用を推奨している。

『I'mPOSSIBLE』日本版公式サイト
https://iam-possible.online/

- アニメーション教材含む全教材はサイトより利用可能（無償）
- 教育関係者を対象に研修会を実施。教材の目的や使い方、展開例の説明や、要望に応じて内容をカスタマイズすることも可能。申し込みはサイトより。（無償）

『I'mPOSSIBLE』日本版 公式X
https://x.com/Iam_possible_jp

◎来春「公平」をテーマにした新アニメーション教材を公開予定！

【連載・県立高校の今】令和６年度　第４回
【解説と紹介】学科紹介①
学科の種類及び普通科について

県教育庁企画管理部教育政策課高校改革推進室

図１

高校では、進学する学科によって学ぶ内容が異なる

千葉県の県立高校への入学にあたり、受検生は目指す高校の、目指す学科へ出願する。

本稿と続く各号では、この「学科」について紹介していく。本稿では、「学科」の解説と、「普通科」の紹介を行う。

なお、これは本年７月に作成した「千葉県立高校ガイドブック」（以下『ガイドブック』）に掲載できなかった情報も加えて作成しているので、そちらも併せてご覧いただければ幸いである。

１　学科の分け方

第五条の分類	第六条第二項の規定
普通科（第一号）	
専門学科（第二号）	**農業、工業、商業、水産、家庭、看護、情報、福祉、理数、体育、音楽、美術、外国語、国際関係、その他**（第一～第十五号）
総合学科（第三号）	

高等学校設置基準による分類
ゴシックが「大学科」

学科は「高等学校設置基準」第５条の規定に基づき普通科、専門学科、総合学科の３つに分けられる。

そのうち、専門学科は、同第６条第２項により、さらに15の学科に分けられている。

一般的に、これら基準に掲載されている学科、すなわち普通科、15の専門学科、そして総合学科を「大学科」、実際に各学校に設置されている学科を「小学科」と呼ぶ。

たとえば、「大学科」の「農業科」は、本県の県立高校では、「園芸科、畜産科、食品科学科、生物工学科、農業科、土木造園科」といった「小学科」で構成されている。

なお、令和６年度現在、千葉県の県立高校に「大学科」の「音楽科」及び「その他」に該当する学科は設置されていないが、県立津田沼高校の普通科に音楽コースが設置されている。

２　普通科　専門学科　総合学科

普通科は、「各学科に共通する各教科・科目」（普通教科）を中心に学び、専門学科では、

普通教科に加え、「主として専門学科において開設される各教科・科目」（専門教科）も併せて学ぶ。専門学科では、在籍中に学ぶ科目のおおよそ３分の１程度が専門教科となる。

図１を見ると、総合学科は普通教科と専門教科の境界が斜めになっている。これは総合学科の特徴を表している。生徒が自らの興味関心に応じて、時間割を編成できることが総合学科の特徴（単位制の特徴でもある）で、編成次第で普通・専門教科の割合が変動しうることを示している。ただし、自由に編成できるわけではなく、関連の深い科目をまとめたグループである「系列」に沿って科目を選択していくことになる。また、総合学科では「産業社会と人間」が必須の科目となっているが、これは次号以降に改めて紹介する。

３　普通科

⑴学習内容

普通科は、先述の普通教科を中心に学ぶ学科である。中学校までに学んだ科目を更に細かく分け、内容を深めて学習する。

⑵多様な普通科

どの普通科でもまったく同じ内容の学習を展開しているわけではなく、学校によって取り組み方は様々である。

普通科の中に、学びの選択肢として「文系」「理系」といった「コース」を設定する場合、生徒が選択できる科目を多くして学びの充実を図る場合、また、先述の津田沼高校のように普通科でも専門的な学びができるコースを別途設置している場合など、多種多様である。

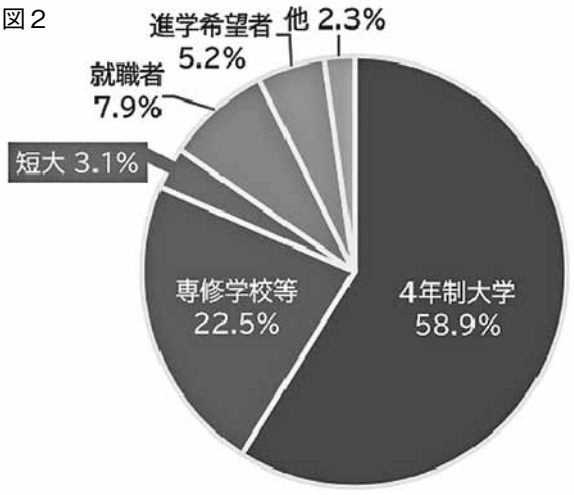
学校別に、どのように学びの選択肢を設けているかについては、ガイドブックに掲載している。

⑶普通科の進路状況

ガイドブックにも、学科別の進路状況をグラフで掲載しているが、より詳細なデータを紹介したい。

普通科では、大学や専修学校への進学だけでなく、就職など幅広い進路選択が可能である。

図２



【出典】令和５年度進路状況調査報告書
（小数第二位を四捨五入）

令和５年３月の進路状況では、約85％の生徒が進学を、およそ８％の生徒が就職を選択している。

進学では４年制大学が最も多く、専修学校等が続いている。専修学校等には、いわゆる専門学校や公共職業能力開発施設等が含まれる。

公共職業能力開発施設等とは、高等技術専門校（本県では今年度からテクノスクールと呼んでいる）や職業能力開発短期大学校（ポリテクカレッジ）等を指す。

また、「進学希望者」の5.2％は、次年度以降の進学に向けて、いわゆる予備校や自宅で学習を続ける者を指す。

なお、「他」の2.3％には、進路未定の者や外国の学校へ進学した者等が含まれている。

４　次回以降の予定

続く各号においても、学習内容や、進路状況等を「大学科」別に紹介していく予定である。

通常の学級における聴覚と視覚支援を用いた自作支援ツールによる行動支援の工夫

習志野市立東習志野小学校教諭　土井（どい）　淳（じゅん）

1　はじめに

文部科学省が行った調査では、通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒が推定8.8％の割合で存在するという結果が示された。また、この支援を要する児童生徒に対して、授業時間内で個別の配慮・支援を行っているとされた割合は約54.9％で多くの学級で適切な支援が十分ではない状況が示唆された。この問題に対して私は、UD（ユニバーサルデザイン）の視点を取り入れた授業により、通常の学級における特別な教育的支援の必要性に対応しながら、学級全体への効果的な指導につなげることができると考える。これまでのUDの発想では、「視覚」が大切にされてきたが、気づきを与える「聴覚」の活用を取り入れることでより細やかな支援を実践したいと考えた。

2　自作支援ツール「アクションメーカー」

自作支援ツール「アクションメーカー」は、大型ディスプレイを通して、一単位時間（45分）の授業の流れやそのときにとるべき行動を「効果音」を伴う「画像」で示すことで、支援を要する児童に必要な指示や説明が通るように作成した。ホーム画面（図１）から各文字をタップすることで、効果音とともに詳しい説明や指示を画面に映す。画面を中央に分け、左側が授業の流れ、右側は説明や指示を伝えるコマンドとした。必要に応じて押すことで効果音が流れ、個別指導を含む全体への指示や支援をすることができる。

図１「アクションメーカー」ホーム画面

実践において効果的だった支援として、「見る」（図２）や「ノートの書き方」（図３）がある。「見る」は、授業中の切り替え時に効果音を合図に視覚による指示をすることで児童の聞き逃しが減り、自発的に活動することができた。「書く」は、板書に対してノートにどのように書けばよいのかを画像で示した。また、左下にタイマーを設置することで時間内に書こうと意識する児童も増えた。

図２「見る」

図３「ノートの書き方」

3　授業以外での自作支援ツールの活用

授業以外での活用は、「朝の準備」や「今月の歌」など、日常的によく使う指示については、常に大型ディスプレイに映している。

活用方法は、学級の実態によって様々なので必要に応じて内容を変えたり、児童と相談したりしながら日々改善している。

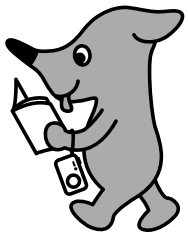
4　おわりに

勉強が得意な子も苦手な子も楽しく学習してほしいという願いから自作支援ツールを開発した。今後も困難を抱える児童を救うために学級全体に細やかな「特別ではない」支援教育に取り組み、心のバリアフリーの推進に力を尽くしていきたい。

千葉歴史の散歩道

房総のたからもの
－人々を魅了した青銅鏡－

県教育庁教育振興部文化財課指定文化財班文化財主事　渡辺（わたなべ）　夏海（なつみ）


千葉県マスコットキャラクター
チーバくん

家を出る前、鏡で身だしなみをチェックする人は多いだろう。今でこそ私たちにとって身近な鏡だが、銅と鉛の合金でできた「青銅鏡」（以下、銅鏡）は、約1,400～1,700年ほど前の古墳時代の人々にとっては、貴重な「たからもの」であった。

房総における銅鏡の出土数は、東日本のなかでは最多をほこる。これは前方後円墳という新しい墓の築造が、関東地方のなかでも早くから始まることと無関係ではないだろう。当時の房総の人々は、他の地域と盛んに交流し、新しい技術やたからものを手に入れていたのである。

今回は、筆者の研究フィールドでもある市原市草刈遺跡の住居跡や古墳の周溝から出土した13点の銅鏡に注目したい。これらは全て大きさが10㎝足らずの小型鏡だが、中国で作られた銅鏡、また、弥生～古墳時代に日本列島で作られたものというように、異なる製作地と時期のもので構成される。さらに、古墳から出土する銅鏡には赤色顔料が付くことが多く、住居跡から出土するものにそれが付く例は珍しいが、草刈遺跡の銅鏡には赤色顔料の付着がみられる。銅鏡の表面状態からその多くは日常的ではなく、祭祀をはじめとした何か特別な機会に使用したものだろう。銅鏡をどのように取り扱っていたのか、また、そもそもどうやって手に入れたのかを明らかにするのは難しいが、全国的に出土例が少ない小銅鐸が当遺跡において同時期に存在することと併せて、弥生～古墳時代における房総の青銅器には他地域とは異なる性格を見いだせるかもしれない。

古墳時代は銅鏡が好まれた時代で、日本列島全体で数千点も出土している。しかし、列島で作られた銅鏡は全体的に反っていることからそこに映る姿は歪んでしまい、身だしなみを確認することはできない。製作に必要な原材料、また製作技術も貴重であり、正しくそれは「たからもの」であったことだろう。

現在、博物館で見学できる銅鏡のほとんどは錆びて緑青色になっているが、作られた当時は金色や銀色に輝いていた。はるか昔の房総の人々は銅鏡に何を見いだしたのか、博物館に行った際はじっくり観察して当時に思いを馳せてほしい。

草刈遺跡出土銅鏡（筆者撮影）

製作当初の銅鏡（複製品・筆者製作）

千葉教育　梅（No. 689）　令和６年11月28日発行

編集・発行　千葉県総合教育センター　（代表）酒井　誠一
〒261－0014　千葉市美浜区若葉２－13　　TEL　043－276－1204
URL　https://www.ice.or.jp/nc/
印　刷　所　千葉市療育センター　いずみの家
〒261－0003　千葉市美浜区高浜４－８－３　　TEL　043－216－2465

次号予告

『千葉教育』菜（No.690）

◆特集　外国児童生徒等教育の実際

○シリーズ　現代の教育事情

千葉大学　名誉教授　新倉　涼子
県立生浜高等学校　教諭　宮﨑　信伍
鎌ケ谷市立道野辺小学校　教諭　岡嶋　弘樹

○提言

土佐工業株式会社　代表取締役社長　柴田　久恵

令和６年度
シリーズ　現代の教育事情

蓮 686号	教職の魅力
萩 687号	交流及び共同学習の実践
菊 688号	小中一貫教育の現状
梅 689号	学級経営を考える
菜 690号	外国人児童生徒等教育の実際
桜 691号	学校・家庭・地域の連携

「千葉教育」は千葉県総合教育センターのWebサイトから閲覧・ダウンロードできます。

千葉教育
菊号　読者アンケート

表紙写真について
東金市立東小学校　「夢や目標に向かって」創立50周年記念行事バルーンリリース